

ボイド = ベアリング論争 (1797–1801) 地金論争の源流とその余波 *

佐藤 有 史 **

The Boyd-Baring Controversy 1797–1801: The Origin of the Bullionist Controversy
and Its Aftermath thereupon*

Yuji SATO**

In this article, I shall clarify fully the theoretical significance of Walter Boyd's *Letter to Mr. Pitt* (1801) and the background of this *Letter* almost for the first time at least in this country. And then I shall argue that it was the Boyd-Baring controversy on the responsibility of the Bank of England for inflation during the Bank Restriction period which, far from being a 'skirmish,' not only marked the beginning of the Bullionist Controversy, but also did influence their later generation very much in that they had to research anew what a 'reasonable limit' of the issue of the Bank notes should be. And I also emphasize the theoretical 'turn' of Sir Francis Baring in later years *in favor of Boyd*. Finally, I shall trace reference to Boyd in the history of monetary thought of the 19th century and the early 20th century.

どなたも、著者の振る舞いもしくは品性に対する早まった判断によって、本出版物の価値に反する推定をしないでください。彼は、熱狂的にピット氏を愛しておりましたし、長年にわたり彼の信頼を享受しておりました。読者におかれては、ボイド氏は一流の能力の持ち主でもなければ、その主題を理解してもしなかったと宣告なさる前に、ピット氏ならびにフォーダイス氏へのこれら『書簡』の日付に気づいていただきたいと存じます。(Boyd 1811, i. 'Advertisement to this edition')

I はじめに

1776年に『国富論』が公刊されて後、イギリスの金融思想史には久しく見るべき動きはなかった。その間、アメリカ独立戦争やフランス革命といった激変を経験して

なお、あるいは累積する国債問題が種々のパンフレットや煽動を生んですら、そうだった。仮に1797年2月26日にイングランド銀行が同行銀行券の正貨兌換を停止することがなかったとしたら、その後のイギリス金融思想史は全く別の道を歩んでいたことだろう。

本稿が対象とする一方の当事者サー・フランシス・ベアリング(1740–1810)は、まさにこうしたイングランド銀行による「現金支払停止」の非常事態を受けて、その数年前からのイングランド銀行と競合する国家の大銀行設立を求めるシティの一部の動きを視野に入れながら、支払制限下ではイングランド銀行券を法貨とすべきこと、またイングランド銀行は発券を自主的に制限すべきことを主張しつつ、現金支払停止の継続を支持し、イングランド銀行は何ものにも代えがたいイギリス金融における「最後の拠り所(the *dernier resort*)」であるという自説を展開したのであった(Baring 1797a; 1797b. Cf. 中村 1962; Fetter 1965, 22–23)。こうしたベアリングの主張は、それだけなら、シティの大立者のひとりによる当時の金融状況の確認と、事態収拾に向けたひとつの提言として受け取られてよいだろう。

だが、ウォルター・ボイドが1801年に1冊のパンフレットを出版した後、イギリスの金融思想をめぐる状況

* 本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)課題番号 17530157 (個人研究)ならびに同補助金基盤研究(C)課題番号 18530146 (研究分担者)による研究成果の一部である。また本稿の草稿は、経済学史学会関東部会(於・東洋大学, 2006年11月25日)で報告された。貴重なご批評を下された会員諸兄姉に感謝申し上げます。言うまでもなくなお残る誤りは筆者のものである。

** 総合文化教育センター 准教授
平成18年12月16日受付

は明らかに一変した。そこには、「ある非常に異なる精神が」(Hollander 1911, 444)何かを語り始めたという印象があるのだ。確かにそれは、本稿で見ると19世紀初頭に一連の新しい思考の展開を用意した。だがその一方で、これも重要なことだが、ボイドは自らのパンフレットにおいて唯一頼るべき経済学的権威として(ヒュームではなくて)アダム・スミスの名のみを引き合いに出した。そうした意味において、ボイドはまた、19世紀初頭に新たな転換を見せた古典派貨幣理論とスミスとの間のある重要な中継点を示唆しているのだ。

本稿は、ボイドのパンフレット、それに対するベアリングの応酬とボイドの反批判、ならびにその最晩年におけるベアリングの「転回」、さらにこうしたボイド＝ベアリング論争がその後19世紀を通じてどのように評価されていくことになったのかについて、できるだけ諸原典の忠実な紹介を通じて素描することを目的とする。イギリス金融思想史における最も重要な論争である地金論争の端緒が、ボイドによる『ピット氏への書簡』(以下『書簡』と略称)とそれが引き起こした一連の論争にあることは、20世紀初頭以来100年の間常識であり続けた。だが、こうしたボイド＝ベアリング論争の詳細を跡づける作業の試みは、少なくともわが国においてはこれまでほとんどなされることがなかったと言えるだろう¹。

本稿の内容は以下のとおりである。第Ⅱ節では、ボイドとその主著『書簡』とをめぐる若干の確認ならびにひとつの疑問が提示される。第Ⅲ節では、『書簡』の理論的概略が示される。第Ⅳ節ではベアリングによるボイ

ド批判の要旨と、それに対するボイドの反批判が示される。第Ⅴ節では、まさにボイドのパンフレットが産み落とした金融思想史上の「成果」と目されるソーントン、キング卿、ホーナーらのボイド評価に焦点が当てられる。第Ⅵ節では、最晩年に1810年の地金委員会の証言者として登場したベアリングの証言内容が確認される。そして最後に、19世紀ならびに20世紀初頭の金融思想史におけるボイド評価の変遷の素描が試みられ、本稿で得られた諸結果の俯瞰と若干の所見とが示されるだろう。

Ⅱ ボイドと『書簡』 あるひとつの疑問

Ⅱ.1 ボイドの生涯

ボイド(Walter Boyd)は波乱に満ちた生涯を送った人だった²。今日では標準的評伝としてコウプのものがある(Cope 1983)。それによると、ボイドの家族とその生い立ちの詳細は不明であるが、彼は1753年11月18日にスコットランドの北部に生まれた。少年時代にアムステルダム、スイスで教育を受け、フランスでの徒弟修業を経た後、1774年にリンカシャーで農場経営の代理人、1782年にはベルギー北西部のオステンドの同郷人の銀行のもとで働き、その後パリに移って銀行家として大成功を収めた。しかしフランス革命で敵性国民として財産を没収され、92年にイギリスに帰国。だが大陸での銀行業の手腕を買われ、W.ピットのもとで大陸との送金業務を請け負い³、なかんずく1795年には対仏戦争の同盟諸国の要のひとつだったオーストリアのハプスブルク朝皇帝への借款(「皇帝債(Imperial Loan or Emperor's Loan)」の起債)を一手に任される。1796-1802年議会入り。1799年にイングランド銀行の与信政策の変更もあって経営危機に陥り、1800年破産。無一文になったボイドは、W.ハスキソンや文人W.スコットらの援助をうけて生活、ナポレオン戦争後の没収財産の回収交渉などを経て自らの地所を得、再び1823-30年に下院議員となる。だが彼の議会活動の記録は全く残っていない。この間、『書簡』を別とすれば、1815年および1828年に減債基金に関するパンフレットを出したが、それらが財政思想史上重要視されることはないようである。ボイドは平穩のうちに1837年死去した。

Ⅱ.2 『書簡』

私が不思議に思うのは、ボイドの『書簡』の命運である。これほど金融思想史上重要な位置づけを与えられてきた文献が、ただの一度も完全な復刻版を与えられることはなかった。『書簡』⁴には3種の版が残されている。1

¹ なるほど、渡辺([1958] 1984; [1966] 1984)はそうした方向への最初の一步であり、本稿はそれを補完するものだと思える向きもあるかもしれない。だが本稿は、全く別個の視角からの独立した論争史素描の試みであるとも見なされるかもしれない。

² 日本語で読める簡単な紹介は、クラバム(Clapham 1944, 2: 16-18)、渡辺([1958] 1984)にある。なお、外国語文献からのすべての引用について、邦訳に原ページ数が付されている場合には煩瑣を避けて邦訳ページの指示を省略した。

³ ボイドがピットといふ、どのようにして知り合ったのかは不明であるが、1794年初頭にはピットはボイドにフランスの為替管理について尋ねていた(Cope 1983, 44)。

⁴ 正式な表題は、『イングランド銀行における正貨発行停止が食糧ならびにその他の諸商品の価格に及ぼす影響についてのピット閣下への書簡』である(Boyd 1801a, 1801b, 1811)。ただし第2版(1801b)にのみ、「サー・フランシス・ベアリング准男爵の公刊物についての所見を含む追加的な注ならびに序文を付す」という副題がある。

ボイド = ベアリング論争(1797-1801) 地金論争の源流とその余波 (佐藤有史)

つは 1801 年 1 月に出版された初版本 (Boyd 1801a) であり⁵, これは扉および序文 8 ページ, 本文 84 ページ, 付録 85-112 ページからなる。他の 2 種はどちらも「第 2 版」と銘打たれているもので (Boyd 1801b; 1811), 1801 年のものは, 序文 55 ページ, 本文 86 ページ, 付録 48 ページ (序文, 本文, 付録は通しページではなく各独立したページ付け) という全体で約 200 ページのものはパンフレットとは言えない分量となっている。1811 年の第 2 版は, 実は初版の復刻に過ぎない (ただし版を急いで作り直したのだろうか, 若干の誤植等があり最も信頼性の劣る版である)。これらのうち, ヴァイナーが言うように (Viner 1937, 120 fn. 3), 1801 年の第 2 版はベアリング (Baring 1801) に対する詳細な反批判を含む最良の版である。本稿ではこれを用いる。

今日に至るまで, 私の知る限り, 『書簡』には完全な復刻版がない。オブライエンによる金融経済学復刻集 (O'Brien 1994) はその編集方針により, 各経済文献の一部のみを復刻したものが主であるため, ボイドのものについても研究上ほとんど役に立たない。ケイビーによる銀行論復刻集 (Capie 1993) の第 8 巻には, 付録を除いた初

版『書簡』の全文, またベアリングのボイド批判 (Baring 1801) の全文を復刻するが, これらの原典のページを消して新しい通しページをつけているため, 研究上非常に不都合がある。しかし私の知る限り, 以上の 2 つが, この 200 年間に与えられた『書簡』の復刻版のすべてに過ぎない⁶。

後に見るように, ボイドは 19 世紀を通じて完全に忘却のうちに沈んだ思想家ではなかった。だが, 既にジョブリンの時代には, ボイドの著作は稀覯本だった可能性がある。

キング卿ならびにボイド氏のパンフレットを, 私は見ることができなかった。しかし前者の説明は『エディンバラ・レビュー』の第 1 号のひとつ [Honer [1803] 1957] に見ることができる。それは, 力作であるばかりか, 非常に美しい著作であったように思われる。リカード氏は, 彼のパンフレットの序文において, それに負っていることを認めている。ボイド氏のものは, ソートン氏のものにもキング卿のものにも先んじた公刊物であった。(Joplin 1832, 33 fn. [] 内は追加)

だがその後, キング卿の著作は 1844 年に復刻され (Fortescue 1844), この復刻版は『エディンバラ・レビュー』でシーニアによる周知の書評を受け取った (Senior 1846)⁷。またソートンの著作はマカロックによって復刻された (McCulloch [1857] 1995)⁸。しかし, ボイドの『書簡』はそうではなかった。なぜだろうか。これは私自身のうちに, いまだひとつの謎として残る疑問である。

III 『書簡』

III.1 スミス貨幣理論の継承 (1) 金紙代替論

ボイドの『書簡』は地金論争の端緒であったばかりか, ハイエクによれば, まさにソートンの『紙券信用論』はボイドに対するひとつの応答でもあった。

少なくともそれが最終的に出版された形において, 『紙券信用論』は部分的にボイドに対する応答として意図されていた見込みが非常に高い。応答を試みていた他の人々は特に成功していたわけではなかったので⁹, およそ 12 ヶ月の間ボイドの議論が有利な地歩を占めていたように思われる。だが, 1802 年の 2 月か 3 月にソートンの著作が現われた時には, それは直ちに最重要の扱いを受け, そこからさらにありとあらゆる議

⁵ イングランド銀行現金支払制限法は 1797 年 2 月 26 日曜日に枢密院令として公布されたが, 「月曜の朝 2 時に, ボイドは友人ジョン・フォードイス (John Fordyce) に長い書簡を書いた。彼は彼とそれ以前に状況について議論していたのだが, その書簡で, 現金支払停止を回避する必要を力説し, フォードイスにビットと直ちに接触するように懇願した。フォードイスは翌日ビットに会うよう努力したが, かなわなかった。で, ボイドの書簡を [下院] 議長ヘンリー・アディントンに手渡すのが精一杯だった。それは遅過ぎた」 (Cope 1983, 135. [] 内は追加)。そのビットへの私信は『書簡』の付録に採録された (Boyd 1801b, App.: 19-23)。そして『書簡』の草稿も, それが出版される 6 週間前に 1800 年 11 月 26 日付でビットに送られた (Boyd 1801b, fn. to 2nd ed.: 83)。第 2 版に追加された付録 F には初版を 1800 年 1 月 8 日午後 9 時に受け取ったとの友人の私信が載せてある (App. to 2nd ed.: 47)。

⁶ ベアリングの諸著作 (Baring 1797a, 1797b) は 20 世紀に各々いくつもの出版社から復刻が出ている。

⁷ 「それ [King 1804] は, 紙幣の理論についての非常に詳細な, そして概して非常に正確な説明を含んでいるので, 40 年以上の議論を経た後でも, それに付け加えたり修正したりすべきものはほとんどない」 (Senior 1846, 323. [] 内は追加)。

⁸ だがマカロックによる復刻版が出る前は, 『紙券信用論』は 19 世紀半ばのイギリスでは既に稀覯本だったのである (MacLeod 1855-56, 1: 256)。

⁹ ハイエクはここに注を付して, とりわけベアリング (Baring 1801) によるボイド批判の不備を指摘する。

論が生じることになった基礎を提供したのである。
(Hayek 1939, 45-46)

それゆえ、こうしたハイクの解釈に鑑みただけでも、ポイドの議論は正確に読み取られるべき資格がある。

だがそれとは裏腹に、ポイドはこれまで、ヒューム流の「貨幣数量説」に基づいて「厳格な地金主義」を最初に単純化された形で展開したというあまりに簡単な処理(e.g., 吉澤 1999, 28-30; O'Brien 2004, 176)を被ることが多かった。本稿で私は、こうした単純化されたポイド解釈こそが、ポイドの議論の性格を不明にしてきたばかりか、ポイドがアダム・スミスの貨幣理論を忠実に再現しつつあった程度を、つまり地金論争と古典派貨幣理論との真の関係を、不明にしてきた一因であると主張する。

まずポイドは、一国の金属通貨、とりわけイギリスのような商業大国の金属通貨は、それだけでは、国民の勤労の生産物全体を流通させるのに到底足りないという前提をおく。

わが国の正貨が、その現在の拡大した状態における国民の勤労ならびに商業の全価値を流通させる目的に対応できないということは、よく知られた真実である。…信頼(confidence)の結果を資本の結果に結びつける上でのわが国の分別の最も幸福な発揮によって、わが国の正貨の力は、その総額によって設定される限界をはるかに越えたところまで及んできた。不断に金銀に兌換可能な紙券通貨の賢明な導入によって、そうした通貨は、金銀が持つありとあらゆる力を正当に獲得してきたのである。(Boyd 1801b, App.: 7. 強調は原文)

すなわち、商業大国にはどうしても紙幣が必要だった。だがその際の紙幣流通の根拠はどのようなものなのか？ それについてのポイドの説明は、十分に引用される値がある。

ありとあらゆる商人、業者、製造業者、いやどんな種類の人であれほとんどすべての人が、事業や出賣のさまざまな支払請求に応ずるために全く使わないで保有しておく必要があると思う貨幣の総額は、彼自身の金

庫の中にはなく、彼の銀行家の手許に預けられるのが一般的である。そしてこの銀行家は、夥しいそうした金額の受託者であるため、経験上、事物の自然な成り行きからしてそうした金額の全部が一度に請求されることはあり得ず、それどころか彼に十分な信用がある間は、それらの預金の一部だけで、自らに対してなされ得る支払請求のすべてに十分応じることができるだろうと思う。彼はそれゆえ、それら預金の一部を為替手形の割引に用いる。これによって彼は、彼の顧客たちの手許にあったとしたら死んだ生産的資金(a dead unproductive fund)であつたはずのものから、収入を引き出すのだ。彼がこうして用いる金額は、わが国の貨幣の力に対するもうひとつの明確な追加分である。／銀行家たちが彼の顧客たちの支払請求に応ずるために手許に保有するレディ・マニは、主にイングランド銀行券からなっており、イングランド銀行券の流通、ならびに銀行家たちの許にあるイングランド銀行券の預金がわが国の一般的流通に与える影響を観察するのは、好奇心をそそる考察事項である。(Boyd 1801b, App.: 9-10. / は改行、強調は追加)

こうしたポイドの紙幣流通の根拠、すなわち金紙代替論においてまず確認されるべきことは次の2点である。第1に、それは、スミスの金紙代替論を非常に正確に踏襲した議論である。すなわち、スミスによれば、銀行券が代位し得る金銀は、実は本来ならば商人たちが恒常的に手許に保持しなくてはならない現金部分(手許現金(ready money))に等しい。それは、その時々を生ずる受け取りと支払とのギャップや予期せぬ支払のために商人が保有する予備的準備としての遊休貨幣残高(「死んだ資本(dead stock)」¹⁰)である。これを銀行信用によって解放することで、諸銀行は一国の経済成長に貢献する。なぜなら、こうして解放された金銀は、国際的に実物資本と交換されて、国内に新たな生産的労働を雇用すべき流動資本をもたらすからである(佐藤 1999b, 150-51)。だからポイドの議論は、ソーントン以後の古典派貨幣理論発展の前提となったスミス金紙代替論(154-55)の重要な中継点を示していると言えるだろう。

第2に、ポイドの議論では、『国富論』では必ずしも明確でなかった商人の予備的準備の所在(それは商人の金庫内にあるのか、銀行に預金形態で集中するのか?)について、それが市中銀行に預金として集中していることが明確にされた。

¹⁰ WN II.ii.88 / 訳 93. 本稿を通じて、『国富論』(Smith [1776] 1976)からの引用は、グラスゴウ版スミス全集で採用されている編・章・項・段落の指示によって行なう。

ボイド = ベアリング論争(1797-1801) 地金論争の源流とその余波 (佐藤有史)

なるほどスミスは、ある箇所で、こうした予備的準備が商人の手許から離れ、当座勘定として銀行におかれる可能性に言及したように見える。

商人が、過大取引をしなくても、ある額の手許現金を必要としながら、しかも割引いてもらえる手形もないという場合が、しばしばあり得る。そのような場合に銀行が、彼の手形を割引くほかに、スコットランドの諸銀行のような楽な条件で、その金額を彼のキャッシュ・アカウントで前貸しし、彼の財の時々の販売からあがる貨幣で少しずつ返済してゆくことを認めるなら、彼は時々¹¹の請求に応じるために資本の一部を遊休させたまま手許現金で保有する必要から完全に免れることになる。…しかしその銀行は、そうした顧客と取引するにあたっては、ある短期間（例えば4ヶ月、5ヶ月、6ヶ月、あるいは8ヶ月というような）のうちに彼らから通常受け取る返済額が、彼らに対して通常なされる前貸し額に完全に等しいかどうかを、大変な注意を払って観察しなくてはならない。(WN II. ii. 60 / 訳 63-64. 強調は追加)

だが、『国富論』の記述の圧倒的大部分は、商人は予備的準備を（金銀の形で）手許に保有している印象を与えるのであり、上の引用も、商人たちが予備的準備を銀行に当座預金の形で保有する可能性を（排除はしないものの）見越していたというよりは、せいぜいのところスコットランド特有の対人信用に基づいた勘定設定への付随的言及にとどまる印象を与える。

だがボイドの主張はこの点ではっきりしていた。商人たちの予備的準備は預金の形で銀行に集中するのであり、銀行家はそのうちの一部を第三者の為替手形の割引に用いるのだ。さらにロンドンの銀行家たちが金庫内に預かる予備的準備は、イングランド銀行券の形をとっており、金銀はイングランド銀行の金庫に集中しているのである。こうして、予備的準備の範囲内での貸出というスミスの金紙代替の原則は、マナタリー・ベースをなすイングランド銀行券の兌換性が維持されさえすれば、確実に守られるはずなのである¹¹。こうしたボイドによる「預金」の重視は、III.3で再び取り上げられるだろう。

¹¹ 「わが国の紙券流通は、それを活動させた主要な大車輪が金銀という軸に依存している限り、それが生じさせた投機によって危険になったことは一度もなかったし、またなるはずもなかった」(Boyd 1801b, 57)。

III.2 スミス貨幣理論の継承(2) 兌換制下での金流出入

スミスの金紙代替論を承けたボイドは、貨幣供給と物価水準との関係をどのように捉えていたのか。私はここでも、ボイドによるスミスの意図的な継承が明確に見られると考える。すなわち、

…仮に、任意に正貨に兌換できないようなこれほど多くの追加的紙券の代わりに、わが国が超自然的な手段によって同じ追加的通貨を同じ期間内に金銀で獲得し、それらを流通水路に投入したとしたら、その時期の範囲内におけるわが国の勤労の増進に全く不釣り合いなこうした流入は、すべてが等しい速度ではなくて、それらが貨幣と自然に接触するのが多いか少ないかに応じた種々の速度で、必ずやありとあらゆる種類の財産の価格を非常に大きく上昇させただろう。私が言いたいのは、…仮に奇跡がこれほど多くの追加的金銀を生み出したとしたら、…そうした追加的量のうちわが国の自然的消化能力を超えた部分はすべて…そうした過剰な数量は、それがわが国では容易に見出すことのできなかった用途を求めて、間もなく他の諸国へと流出したはずだということである。だが、イングランド銀行券にはそうした質は全くない。(Boyd 1801b, 8-9. 強調は追加)

なるほど、このボイドの主張の前半は、外生的な貨幣供給増があれば金属貨幣ですら物価騰貴をもたらし得るという典型的な数量説(佐藤 2003, 99)を彼が抱いていたようにも見える。だが、ボイドがこの引用文で主張したのは「私が言いたいのは」で始まる後段、すなわち金属貨幣の供給増は、一国における物価水準の騰貴をもたらしというよりはむしろ、余剰分は流通の水路を溢れて有利な用途を求めて海外に流出するということだ。すなわち、こうしたボイドの議論は、まさに次のスミスの議論を全く逐語的に踏襲しているのである。

[正貨で100万ポンドからなる流通水路に、20%の準備率のもとで80万ポンドの紙幣を投入すれば]80万ポンドは、その国の流通で使用され得る額を超えるのであるから、溢れ出るに違いない。しかしこの額は、国内では使用できなくても、寝かせておくにはあまりに貴重である。したがって国内では見出し得ない有利な用途を求めて国外に送られるだろう。しかし紙幣を

国外に送ることはできない。(WN II.ii.30. [] 内は追加)¹²

ポイドによるこうしたスミスの金流出入メカニズムの踏襲はまた、彼のスミスの金紙代替論の踏襲と首尾一貫していることに注意されねばならない。スミスにとっては、信用によって解放された金銀は、(一物一価の法則のもとで)速やかに国外に流出して実物資本と交換されるのであり、兌換制下での信用は国内物価水準を高めることはないが、経済成長に寄与し得た。だから、仮にポイドが、スミスとは異なりヒュームのように銀行信用による国内物価水準の上昇を認めたとしたら、ポイドは、そのスミスの金紙代替論の踏襲において矛盾をきたすことになっただろう。

最後に、これも重要なことだが、実はポイドは「奇跡的な外生的金供給増」など少しも信じていなかったことに注意を喚起しておく必要があるだろう。すなわち、III.4で見る彼の「通貨の減価」と「貴金属の価値下落」との萌芽的な区別において、彼は、金属の量の「何らかの驚くべき増加」は、仮にあり得るとしても産金部門の反応を考慮したきわめて長期においてのみ可能であるに過ぎないと主張したからである(Boyd 1801b, 65)。

III.3 通貨の定義

『書簡』が書かれた動機についてのポイドの主張は明

¹² エインジェルは、こうしたスミスの議論との明らかな類似を全く無視し、ポイドの金流出入論「の結論は、結果は物価騰貴となるだろうが、余剰貨幣は『わが国では容易に見出すことのできない用途を求めて』他の諸国に輸出されるだろう、というものだった。この命題は、要約的な形だが、もちろんヒュームの貴金属の世界配分論と同じである」(Angell 1926, 45)と述べる。またウーも誤ってこうしたポイドの主張を「これはヒュームの学説である」(Wu 1939, 87 fn. 5)と述べる。数量説論者ヒュームの物価・正貨流出入論(佐藤 2003, 99–100, 101–103)には「有利な用途を求めて流通の水路を溢れ出す」という議論は全くなかった。なお、『書簡』を通じて、「流通水路」「流通の車輪」といったスミスにおなじみの比喩が多用されていることに注意しておいてよいだろう(Boyd 1801b, 8, 9, 12, 44, 57, 66, 67)。

¹³ こうしたポイドの文言を捉えて、「貨幣数量説」と見なされることも多い(e.g., Hollander 1911, 446)が、しかしそうした解釈を裏付ける、『書簡』が外生的貨幣供給に物価が比例するという明確な数量説の定式化を行なった証拠は、全く挙げられていない。渡辺([1958] 1984, 55 注(4))が述べたように、ポイドはこうした文言においてむしろ単に「事実を述べているにすぎない」と見なした方が無理がない。

確だった。1800年現在通貨の過剰があり、そのため生じたインフレーションが種々の害悪を起こしているというのがそれである。すなわち、イングランド銀行が1797年に金兌換を停止して以来、

... 枯渇した流通によって生じた惨状をその源泉にまでたどることができたのと同じ諸原理によって、私は今や、過去2年間に徐々に生じ、最近かくも非常な高さに到達した必需品、便宜品、奢侈品のほとんどすべて、いやそれどころか交換価値をもつほとんどあらゆる種類のものの価格騰貴は、主に流通媒介物への追加から生じているのではないかと思うようになった。(Boyd 1801b, 3)

実際、1795年12月までの3年間のイングランド銀行券の平均流通額は1,197万5,573ポンドであったのに、1800年12月6日のそれは1,545万970ポンドであった。すなわち10分の3(350万ポンド)もの増加が生じていたのである(Boyd 1801b, iii)。

一国における貨幣の増加、あるいは貨幣の諸機能を果たす紙券の増加は、そうした貨幣もしくは紙券を減価させる傾向があるということはあまねく承認されている原理である。それはその作用において、引力の法則と同様に恒久不変である。(7)¹³

こうしたポイドの主張を支えていた彼の「通貨」の定義をここで確認しておかなければならない。ポイドによれば、

この書簡においてほとんど同義語として用いられている「流通手段(Means of Circulation)」、「流通媒介物(Circulating Medium)」ならびに「通貨(Currency)」によって私が常に理解しているのは、為替手形とか海軍手形とか国庫証券とかその他のどんな流通証券(negotiable paper)とも対照区別される、レディ・マニ。それが銀行券からなろうと正貨からなろうとである。前者は、私が常にそうした用語で理解してきた流通媒介物のどの部分をもなしていない。後者は、流通者(Circulator)である。前者は単に流通の対象物(objects of circulation)であるに過ぎない。(1–2 fn. 強調は原文)

この注の主張からすれば、ポイドは、通貨とは正貨と銀

ボイド = ペアリング論争(1797-1801) 地金論争の源流とその余波 (佐藤有史)

行券のみを指すと定義しているように見える(第Ⅴ節で見るように、この注こそが、ソーントンによって『紙券信用論』においてボイドが直接に批判されることになった文章だった)。

だが、先にボイドの金紙代替論で確認したように、ボイドは商人の予備の準備が銀行に預金の形で集中していると論じていた。それどころか、ボイドは、イングランド銀行による過剰発行を論じるための算定の仕方において、イングランド銀行が発行する通貨のうちに預金を含めねばならないことを明確にしていたのである。

しかし、(イングランド銀行が同様に責を負うべき帳簿残高、ならびに同行の金庫内の正貨についての報告抜き)単なるイングランド銀行券の報告からは、現在の流通高と以前の流通高との間の明確な差額について、いかなる正確な見積もりも行なうことはできない。(Boyd 1801b, iv. 強調は追加)

それでもボイドは、そうした情報の欠如に苦しみながらも算定を行ない、例えば 1797 年のイングランド銀行の負債総額について、流通銀行券が 864 万 250 ポンド、そして、

本当は流通していないとはいえ、そうした信用のすべてがイングランド銀行の帳簿において貸方に記入された人々の意のままにイングランド銀行券に転換されたかもしれないことを考慮して、実質的にはイングランド銀行券と見なしてよいかもしれないイングランド銀行の帳簿の貸方によって、513 万 140 ポンド。(11. 強調は原文)

¹⁴ それに対し、イングランド銀行は正貨を「177 万 390 ポンドのみ保有するに過ぎな」かった(Boyd 1801b, 11)。ところで以上の、イングランド銀行が 1800 年 12 月に議会に提出した報告に基づくボイドによるイングランド銀行券の 1793-5 年の平均発行額ならびに 1800 年 12 月時点の発行額は、よく利用されてきた 1832 年イングランド銀行特許状委員会報告書にまとめられた数字に、やや近いが異なる(例えば Clapham 1944, 1:297 における数字を見よ)。だが 1797 年のイングランド銀行券流通額の 850 万という数字は、1832 年のものではなく、1819 年にイングランド銀行現金支払再開委員会報告書に出された 5 ポンド以上の同行銀行券流通額にほぼ一致する(以下の表 1 を見よ)。350 万という(おそらくは)振出勘定(Drawing Accounts)はいずれの資料にも出てこない。概してイングランド銀行の秘密性は 1832 年まで悪名高いものがあったので、ボイドが正確な情報を入手するのは絶望的であったに違いない。

ゆえにボイドは、イングランド銀行券の総額を 1,377 万 890 ポンドと推定したのである¹⁴。

だからボイドは、「預金」を通貨に含めた。現実には手許現金として流通する銀行券は「積極的流通」、種々の決済において実質的に通貨として機能する当座勘定は「消極的流通」として、ともに総通貨量に算入されるのである。

ロンドンの一銀行家の帳簿において彼の顧客たちに支払われるべき残高と、一地方銀行の流通銀行券とは、公衆が一方および他方に対して行なう権利がある請求額を等しく構成している。そして、各々がそうした請求に応えるために準備として持つイングランド銀行券ならびに正貨の額と、各々によって当然支払われるべき額との差額は、等しくわが国の流通媒介物の力に対する追加である。もっとも、一方の場合における差額は当座勘定(open account)から生じ、他方の場合には一覽払の約束手形の流通から生じるとはいえ。……地方銀行券の流通は、それを発行する銀行の適切な行動から生ずる積極的流通(Active Circulation)と定義できるだろう。ロンドンの銀行家のそれは、彼に対して自らの指圖書を発行する力を持つ他者の操業から生ずる消極的流通(Passive Circulation)と呼べるだろう。(Boyd 1801b, 20-22. 強調は原文)

イングランド銀行は、(同行の積極的流通をなす)銀行券が 864 万 250 ポンドに達し、(同行の消極的流通をなす)帳簿における残高が 513 万 140 ポンドに達した 1797 年における同行の業務の状態から明らかなように、両方を併せもつ。(Boyd 1801b, fn. to 2nd ed.:22 強調は原文)

こうした「預金通貨」の取扱いは、例えばソーントンによる(いささか単純化された)ボイド批判などを通じて間接的に伝えられたボイド像とは、一致しない。だが、こうしたボイドの本当の議論は研究史上全く等閑視されてきたわけではない。

私の知る限り、最も早期にこうしたボイドの預金通貨の議論に着目したのはマクラウドである。マクラウドは主著『銀行業の理論と業務』初版の第 5 巻第 5 章「信用の理論について」において、「為替手形と約束手形は紙券通貨の一部をなす」との自説から、「さまざまな著者たちが為替手形と約束手形はわが国の流通媒介物の一部

をなすかどうかに関して反対の意見を抱いてきた。傑出した商人ウォルター・ボイド氏は述べる」(Macleod 1955-56, 1:264-65)として、先に引用したボイドによる「通貨は正貨と銀行券のみ」とする注を全文引用し、そして直ちにそれに続けてソーントンによるボイド批判を引用する。

他方、その後間もなく書き著したソーントン氏は、為替手形の使用を描写した後にこう述べる。「それらは明らかに、最も厳密な意味において、わが王国の流通媒介物の一部をなす」[Thornton [1802] 1939, 92 / 訳64]。そしてこの文章に対する注の中で、[ボイドは]諸手形をわが国の流通媒介物の一部であると全く見なさないという他の多くの人々が陥ってきたのと同じ誤りを広めている、と非難する。(265. []内は追加)

そしてマクラウドは、その後の同書の諸版において、こうしたボイドの通貨論の記述をイギリス金融(論)史の変遷を取り扱った第Ⅱ巻へと移し、ボイドの通貨論が直接に通貨学派の通貨観の基礎となったという自説をより明確化する。「ボイド氏の意見の少数の痕跡がこの時期の後のある種の著者たちのうちに見つかるかもしれない。だが、こうした見方は1840年の委員会できわめて顕著に提示されたので、われわれは直ちにそれに移行してよいだろう」(Macleod 1876, 2:306. 強調は追加)。だがそれに矛盾するように、初版では触れていなかったボイドにおける預金通貨認識をも同時に指摘し始めたのである。

だがボイド氏は、その序文でこう述べる。「しかし、(イングランド銀行が同様に責を負うべき帳簿残高、ならびに同行の金庫内の正貨についての報告抜きの)単なるイングランド銀行券の報告からは、現在の流通高と以前の流通高との間の明確な差額について、いかなる正確な見積もりも行なうことはできない」[Boyd 1801b, iv]。ボイド氏はそれゆえ、イングランド銀行の信用もしくは預金を通貨という名称のうちに含めており、彼の通貨の観念はレディ・マニだったので、小切手もまた彼の考えでは通貨であったことは全く明らかである。(305. 強調および []内は追加)

こうした記述は、同書最終版の第6版までそのまま残さ

¹⁵ だが興味深いことに、ヴァイナー(Viner 1937)はマクラウドの諸著作に一切言及しなかった。

れた(Macleod 1902-6, 2: 312-13)。

ヴァイナーもまた、ボイドにおける預金通貨の認識に気づいたひとりであった¹⁵。

19世紀の初めにおける現金支払制限の間、銀行預金の膨張が物価騰貴ならびに地金につくプレミアムをもたらし際に演ずる役割は、論争の主題となることは一度もなかったが、しかし、地金主義および反地金主義の双方の多くの著者たちは、貨幣的過程についての彼らの分析において、銀行預金に、銀行券のそれと同じ役割を割り当てていた。ボイドは1801年に、ロンドンの銀行家たちの「当座勘定(open account)」は、地方銀行券と等しく、「わが国の流通媒介物の力に対する追加」とであると考えた。銀行券は、諸銀行の「積極的流通」であった。帳簿信用は、それらがその所有者たちが銀行に指図書を発行する場合だけ流通するがゆえに、「受動的流通」であった。(Viner 1937, 244)

だからヴァイナーによれば、通貨論争期におけるJ. ペンントンならびにR. トレンズらによる預金通貨の「発見」は、実はボイド以来の「旧来の学説」の繰り返しに過ぎなかった。

III.4 兌換性と銀行券の「過剰のテスト」

ボイドは、銀行券の兌換性について次のように主張する。

私は、ひとつの原理として、紙券の発行を安んじて規制し得る基準はひとつしかない、それは紙券の正貨への即時兌換という条件であるということ述べた。どんなものであれ、それ以外の基準によって、一国の流通界が必要としたり、不都合なしに支えることができない紙券量を確定しようとする試みはすべて必然的に、海図も羅針盤も持たずに思い切って海に出る船乗りの航海に待ち受けるものにも似た、不確実さや危険を帯びるに違いない。(Boyd 1801b, pref. to 2nd ed.: x. 強調は原文)

なぜならボイドによれば、本節で見たように、兌換制下では金紙代替と金流出入メカニズムのおかげで、諸銀行が発行する負債(銀行券と預金)が変化させるのは、国内の総貨幣供給量の大きさではなくて、その構成のみに過ぎないからである。万一信用膨張が行き過ぎて金流出が増大し、為替市場が不利に転ずるとしても、

ボイド = ペアリング論争 (1797-1801) 地金論争の源流とその余波 (佐藤有史)

…イングランド銀行からのギニー貨のこうした流出の結果は、まさにおのずと不利な為替に対する強力な解毒剤であるばかりでなく、それは自然にイングランド銀行がこうした流出の諸結果に対する防衛措置をとるように仕向け、そしてこうした措置が今度は為替をその自然的水準に回復させる傾向があった。(Boyd 1801b, 31-32. 強調は原文)

だが、イングランド銀行券から「あの普遍的な価値の標準 (that universal standard of value)」(Boyd 1801b, xii) たる金との兌換性が剥奪されるや否や、「その機関 [イングランド銀行] は、不利な為替の害悪を改善させたり、鑄貨と地金との間の均衡を回復させたりするためのいかなる努力も強制されることはない」(32. [] 内は追加)。不換制下における信用膨張の諸結果は、(銀行券は輸出できないがゆえに) すべて国内に降りかかるのである¹⁶。

そしてその結果、不換銀行券の過剰発行は、そうした一国内に限定された銀行券の「減価 (depreciation)」をもたらす。普通の人々は、まず、それを物価騰貴として観念する。

すべての人が、彼の切り詰められた安楽品のうちに、あるいは彼の支出の増加のうちに、この憂鬱な真理の存在を感じている。だが、俗な言い方で「価格の騰貴」という名を持つものは、ことによるともっと適切には「紙券の減価 (Depreciation of Paper)」と呼べるかもしれないということを誰もが知っているわけではな

¹⁶ ボイドは兌換性のケースと不換性のケースとを混同した、とエインジェルは主張したが (Angell 1926, 45)、ウーがエインジェルを批判したとおり、ボイドは明確に区別していた (Wu 1939, 87)。

¹⁷ ここに、人口に膾炙し、リカードウの処女パンフレット (*The High Price of Bullion, A Proof of the Depreciation of Bank Notes*, 1810, in Ricardo 1951-73, III) でも採用された周知の表現の端緒がある。

¹⁸ なおホートリーの次の主張をボイドと比較せよ。「1800 年 5 月に、金はロンドンでプレミアムつきの値をつけ始め、その価格は 1 オンスあたり 4 ポンド 5 シリング、つまり 3 ポンド 17 シリング $10\frac{1}{2}$ ペンスの鑄造価格を 9 パーセント上回った。これが、イングランド銀行券の減価の始まりであった」(Hawtrey 1928, 332)。ボイドがポルトガル金貨を例示したのは、イギリスの金貨の市場売買は非法だったからである。

¹⁹ ソートンによる当該箇所のキング評注を見よ。「鑄貨形態にある金の価値の、地金形態における金に対するこうした劣位は、しかしながら、流通媒介物全体の量が過剰であり、したがって減価しているという事情から生じているかもしれないし、そして普通はまさにそれから生ずるのである」(Thornton [1804] 1939, 316)。

い。これについては、金地金の現在の価格のうちに非常に強力な証拠 (proof)¹⁷ が存在するのであって、それは、その性質から他のどんな証拠にもまして人々の普通の感情ならびに理解力に一層痛切に感じられるものである。(24. 強調は追加)

そしてボイドは、1800 年下半期における金の価格について、その鑄造価格が 1 オンスあたり 3 ポンド 17 シリング $10\frac{1}{2}$ ペンスであるイギリスの標準金と同じ質の「ポルトガル金貨」が、ロンドン市場において 1 オンスあたり 4 ポンド 5 シリングで売られてきたという事実、すなわち金が市場で $9\frac{1}{8}$ パーセントを上回るプレミアムをつけてきたことを指摘する¹⁸。

さらに重要なのは、こうした不換制下での銀行券の過剰発行による通貨の減価は、銀行券ばかりでなく鑄貨を含む全通貨に平等に作用するという事実だった。

私は、ギニー貨が平価以外の値で交換された例はひとつもないと信ずる。その時々国内流通という共通の目的のために用いられている少数のものは、対応するそれらの紙券での現在価値で通用するに過ぎない。…だがそれにもかかわらず、適切な重量を持つ時のわが国の鑄貨の、つまり…そうした鑄貨を構成している原材料の、内在価値 (*intrinsic value*) は、この計算によればわが国の一般的通貨のそれを $9\frac{1}{8}$ パーセント上回することは明白であるに違いない。鑄貨としてのその現在標準価値における金と、ひとつの商品としてのその内在価値との間にそうした開きがある間は、言い換えれば、金の実質価値が、どのように構成されていようがわが国の通貨のそれをこれほどまでに上回っている間は、鑄貨の多くはそうした開きから利潤を得るために必然的に溶解されるだろう。(26. 強調は原文)

こうしたボイドの議論は、後にキング卿が鑄貨の減価は鑄貨の品位の低下 (削り取りや摩損) のために起こるかのような議論 (King 1804, 30-31)¹⁹ をしたのに比べて、むしろずっと正確な認識を示していると言わなくてはならない。

そして、「国内市場において金の価値を上昇させるのと同じ事情は、他の諸国の通貨と比較された場合に、必然的にわが国の通貨を減価させる傾向がある」(Boyd 1801b, 27)。すなわち、不利な為替相場が必然的に出来るのだ。それゆえ、

地金につくプレミアム, 低い為替相場, 諸商品一般の高価格を, 私は紙券の過剰の徴候かつ結果として言及してきた。(Boyd 1801b, pref. to 2nd ed.: xxxi)

III.5 通貨の減価と一般物価の騰貴 スミスの援用

だがボイドの主張には, 過剰発行によるイングランド銀行券の減価が, 現実の物価水準の騰貴となって確かに現われるという証明すべき事柄がまだ残っていた。

物価騰貴のうちで最も深刻なものは食糧価格の騰貴であった²⁰。これについては, ボイドによれば, 既存の4つの説明の仕方があった。すなわち第1に, 天候不順による凶作。第2に, 穀物の買占め行為。第3に, 人口増²¹。第4に, 戦争。このうち第3の人口増による説明について言えば, ボイドは「特に今年に限って穀物価格をこれほど大きく上昇させたわが国の人口への異常な追加の理由を説明するためには, およそ1, 2年にわたる並外れた多産の時期があったに違いないと想定する必要がある。... どんな国でも自国の人口が半世紀においてやっと予想し得るに過ぎなかったような異常な成育を1, 2年のうちに成したのを見出すことなど, ありそうもない」(60-61)と言う。この反論には説得力がある。

第1, 第2, 第4の説明法については, ボイドは、『書簡』で引用されるほとんど唯一の経済学者²²であるスミスを引き合いに出し, スミスであればそれらにこう反論するだろうという仮定的回答を述べる。

さて閣下, 少しの間, 『国富論』の著名な著者が生きておりこうした物価における革命の原因に関して彼の意見を求められたと仮定させて頂きたい。... 彼[スミス]は, 悪天候によってもたらされた穀物不足はその物品の価格騰貴の明白かつ自然な原因であるが, しかし偶発的な穀物の高価格は必ずしも他のすべての商品

の価格騰貴をもたらさないだろうと言うだろう... 彼は, 買占めおよび高値での売りさばきの諸結果についてのまさに誤りを暴かれた学説を輕蔑して扱うだろう... 彼は確かに, 戦争は必然的に多くの食料品の浪費という結果をもたらし, 国を大きな出費に巻き込むに違いないとはいえ, 戦争が, 以前の戦争, いや今の戦争の初めの時期に一度も生み出すことのなかった諸商品の価格への影響を生み出したとは認めないだろう。彼は, 選定された部分的な諸原因のどれひとつとってみても, 一般的な諸結果には対応していないことを見出すだろう。(62, 63, 64-65. 強調は原文, []内は追加)

私はこうしたボイドによる仮定的なスミスの援用の仕方は, スミスの思考法の実に正確な踏襲であると考え。とりわけボイドは「説得力豊かに」(Wu 1939, 87), 部分的原因は一般的原因を生み出すはずがないから, 穀物不足(それは穀物の相対価格を上昇させるのみだ)が一般物価の騰貴をもたらしはしない²³と論じていたことは認められねばならない。

だがその一方で, ここにこそ, ボイドの『書簡』の大きな弱点のひとつもあったことが強調されねばならない。まず, 一般物価の騰貴は, 通貨の減価の「考えられる徴候でしかない」であり, 紙券の減価の十分な証拠ではない」(Wu 1939, 86)。それはもしかして, 課税のせいかもしれないし, 本位金属の価値下落のせいかもしれない。ゆえに, それは通貨の過剰とは全く関わりがないかもしれない。通貨の「減価」の定義を厳密に本位に対する減価(だから通貨タームでは本位金属にプレミアムがつく)と定義することで(佐藤 2003, 100), こうした概念的混乱を回避する洗練は, 後のリカードウに委ねられることとなったのである。

さらに致命的だったのは, ボイド自身が「部分的原因」に過ぎないと断じた食糧の価格騰貴を, イングランド銀行券の過剰発行の証拠として『書簡』の表題ならびに本文の随所で利用したことだった。なるほど, イングランド銀行の信用政策の不備を食糧問題につなげることは自著に世間の耳目を引く上で好都合だという判断があったのかもしれないし, あるいは利用し得るデータの制約から最も入手しやすい穀物価格に議論を集中させたという事情もあったのかもしれない。だがこれこそが, 後にトゥックによる猛烈なボイド批判を招く元となったのだ。すなわちトゥックによれば,

²⁰ ボイドは、『書簡』の付録Aに, 『ロンドン・ガゼット』から1795-1796年, および1799-1800年のそれぞれについて小麦1クォーターあたりの月ごとの平均価格の一覧表を掲載し, それに基づいた各2年間の平均価格をそれぞれ77シリング2ペンス,⁸⁷シリング3ペンスと算定し, 1799-1800年における食糧価格の騰貴傾向を提示する。

²¹ 人口を食糧騰貴の原因とした論者としてボイドが念頭においていたのは, マルサスの『食糧高価論』(Malthus [1800] 1986)であった蓋然性が高い。マルサスのこのパンフレットは匿名で出版された。

²² もうひとり, 自己の見解を補強するためのゾーントンへの言及(Boyd 1801b, 78 fn.)である。

ボイド = ペアリング論争 (1797–1801) 地金論争の源流とその余波 (佐藤有史)

1800 年「ママ」の秋、ピット氏への書簡の形でボイド氏によって出版された、当時かなりの注意を引いたパンフレット...は、これ以上ないほど明々白々な事実を否定して、全く根拠のない仮説をそれに置き換えるために提示された巧妙な議論の標本として役立つだろう。

(Tooke and Newmarch 1838–57, 1:229)

こうしてトゥックは、先に見たボイドによる当時の物価騰貴の 4 つの説明法の批判を長々と引用し、1799 年からの「連続 2 年の著しく不十分な収穫から生じた大きな食糧不足の存在に本気で疑念を抱く」人がいるとは「全く考えられない」(232)と痛罵したのだ。このようにトゥックが、ボイドの学説は「軽率に」(*ibid.*)「誇張された」(245)ものであるという印象をその『物価史』第 1 巻のそこかしこで広めたのは、ボイドにとって不幸だった。確かにキング卿が同情したように、ボイドが戦略的に食糧価格をイングランド銀行券の減価の証拠として提示したのは「とりわけ不運だった」(King 1804, 32–33 fn.)。

それでもボイドには、後年の地金主義者たちの中ですら混乱をきたした人々もいた「通貨の減価 (depreciation)」

²³ ボイドは、仮に為替の下落がインフレの進行度より急速であれば、それはイギリスにとってポンド安による輸出ドライブとして機能し、輸出産業を中心に勤労に刺激を与えるに違いないが、しかしそれは「そうした事情のもとで勤労が期待して当然なはずの賃金の上昇」が出来るまでの限定的な効果に過ぎないと指摘する (Boyd 1801b, 35–36)。こうしたボイドの主張は、「減価が外国貿易の進路に及ぼす影響の今日の諸理論へと向かう方向に十分あった」(Angell 1926, 46; cf. Wu 1939, 88)とか、「需給の弾力性が為替減価後に輸出に対して持つ関係についての現代の議論を思わせる、ある重要な理論的問題を発展させた」(Fetter 1965, 32)などと評価されてきたが、しかしそれは当時の商人間で共有されていた「常識」のひとつに過ぎない。一例としてペアリング (Baring 1801, 20) などを見よ。

²⁴ 第 2 版に追加された付録に採録されたボイドの友人からの書簡を見ると、既にインフレーションの所得再分配効果が議論の中心のひとつをなしていたことがわかる。「仮にわれわれ全員が、われわれの以前の状況に応じて等しく、あるいは比例して、こうした想像的富の流入に参加するとしたら、また仮にわが国が他の諸国とは無関係にあるとしたら、それはほとんど重要でないでしょう。というのは、諸商品の名目価格が変化するだけでしょうし、事物は間もなく自らの水準を見出すだろうからです。ところが実情は、そうした水準はここでもやがて見出されるにせよ、しかしその合間に、人民のうちの労働階層および下層の階層の悲惨は極度のものとなるでしょうし、その所得が固定されており以前は安楽だった人々は貧困へと永遠に陥められるでしょう」(Boyd 1801b, App. to 2nd ed.: 36. 強調は原文)。こうした所得再分配論には、後のリカードウの洗練を予感させるものがある。

と「本位金属の価値の減少 (diminution)」との重要な概念的区別 (e.g., Ricardo 1951–73, 5: 203–4) の認識の萌芽を早くも見せていたという功績が帰せられるべきである。すなわちボイドは、なおスミスに仮託してこう述べる。

彼 [スミス] は自然に、何らかの重要な原因が金銀の価値を減少させ (diminished) なかったかどうかの研究にとりかかるだろう。彼は、それら金属の量の、あるいはそれらの力の、何らかの驚くべき増加がありはしないかと思い始めるだろう。だが彼は、そうした増加は 20 年から 30 年の期間には全く現実的だと見なすかもしれないけれども、金属それ自体についてであれ、それらの力についてであれ、彼が勧告したし勧告することができた唯一の種類の流れである一覧払でそれら金属で支払われる紙券流通によって、そうした莫大な増加が 3, 4 年の短い期間に起こるはずがないことを知るだろう。(Boyd 1801b, 65. 強調は原文, [] 内は追加)

すなわちボイドによれば、「貨幣の価値の自然的減少 (natural diminution of the value of money)」(Boyd 1801, fn. to 2nd ed.: 45 強調は原文) は産金部門のきわめて長期における供給増の結果としてはあり得るものの、短中期の銀行の信用政策によってもたらされる「通貨の減価」とは明確に区別されるべきものであった。

III.6 インフレーションの責任

インフレーションは、なるほど一時的に限定的な刺激を産業に与えるものの²³、しかしその弊害は、そうした便益と比較するのも愚かしいほど甚大なのはボイドには自明だった。

すなわちインフレーションは、「必需品、便宜品、奢侈品のほとんどすべて、いやそれどころか交換価値をもつほとんどあらゆる種類のものの価格騰貴」(Boyd 1801b, 3) や、「わが国の全輸入品」(35) の騰貴を通じて経験される「支出増」(24) の苦痛をもたらすばかりでない。インフレーションは所得の再分配効果を有し、年金受給者や公債所有者といった固定所得を得る人々の実質所得を減少させるのである。

もしわれわれが、国家の債権者たちに影響を与えるかもしれないような紙券の考えられる将来的減価を熟考するなら、公債の元金の名目価値を膨らませてきた紙券の豊富は、真の公信用の破壊の種を孕んでいるとわれわれが結論づけることには十分な根拠がある。(44)²⁴

ポイドがこうした正貨支払制限期におけるインフレーションの責任の所在をどう考えたのかという点こそ、研究史上最もよく言及されてきたポイドの主張のひとつである。

〔支払制限期にはイングランド銀行券が〕今や、わが国の全紙券流通がそれへと分解する究極の要素（わが国の通貨だけがそうであるべきもの）となった²⁵。イングランド銀行はわが国のすべての流通の大源泉であり、そして同行の紙券の増減によって、ありとあらゆる地方銀行の紙券の増減は絶対確実に規制されるのである。（Boyd 1801b, 20. [] 内は追加）

先に見たように、ポイドは、彼の金紙代替の論理とそこから出てくる必然的結論として、商人たちの予備的準備は預金勘定の形で銀行に集中し、とりわけロンドンの市中銀行家たちはそれをイングランド銀行券の形態で保有すること、さらにこれは地方諸銀行の準備としての「ロンドン資産」として機能していることを強調した上で、地方諸銀行が発行する銀行券は「積極的流通」、ロンドンの市中銀行家たちの許に保有された預金勘定を「消極

的流通」と呼んでいた。こうした積極的流通ならびに消極的流通は、

ある特定時点でのイングランド銀行券もしくは正貨が豊富か稀少かに比例して、大きくなったり小さくなったりするに違いない。ロンドンの銀行家の勘定ならびに地方銀行家の銀行券から生ずる流通手段への追加は、社会にとって公正で、合法的で、貴重な追加物である。…こうした勘定ならびに銀行券の程度が過去2, 3年の間に大いに増加したとすれば、それはただ、イングランド銀行による増発からのみ生じ得たのであり、前者は単にその付随の結果でしかない。地方銀行券の過剰から生ずる不都合は、二次的な原因としてのみしか作用し得ないのだ。（Boyd 1801b, 22, 23. 強調は追加）

だから、正貨支払制限期には地方諸銀行が一定のイングランド銀行券準備率のもとで操業したとすれば、地方諸銀行が「安価な準備の安価な入手」の保証のもとで膨大な信用創造をなし得たことは、想像するに難くないだろう。

さらに、イングランド銀行には安価な準備を市中に過剰に供給する利潤動機があった²⁶。

…その利潤が主に自行銀行券の流通から生じ、そうした利潤にあずかる人々によってもっぱら指揮されているような会社が、そうした人々が1797年2月以来享受してきた許可が与えた誘惑に耐えてきたとか、おそらく耐えられるだろうなどとは思えない。彼らがこうした誘惑に抵抗してこなかったということは、その時期以来徐々に起こってきた物価の全般的上昇からして、あまりに確実なことでしかないように思われる。（Boyd 1801b, 4; cf. *ibid.*, 32, 50）

シルバリング (Silbering 1924) = エインジェル (Angell 1926) は、シルバリングによる統計上の数字から、地方銀行券はイングランド銀行券発行量とは無関係に増発されたこと、ポイドのイングランド銀行批判は個人的な偏見に基づくこと（ポイドの「イングランド銀行に対する深い個人的怨み」(Silbering 1924, 405)）、以上を根拠にしてポイド = 地金主義者たちによる地方銀行券量はイングランド銀行券量に依存するという主張を批判した。だが、ポイドの記述を比較的好く読んでいたヴァイナー (Viner 1937, 156-165) の後には、シルバリング = エインジェルによ

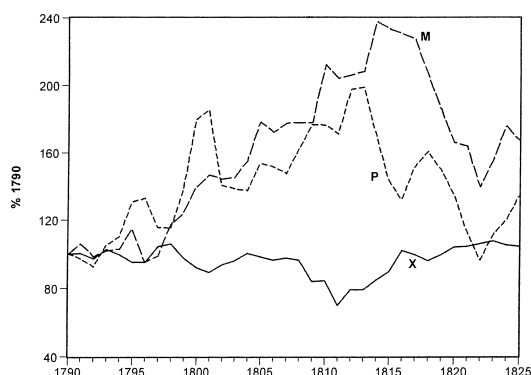
²⁵ ポイドが「本位 (*standard*) の明確な貶質 (*a positive degradation*)」(Boyd 1801b, 66. 強調は原文) によって何を言わんとしていたのかについて、エインジェルとヴァイナーとの間でかつてあまり意義のない。それは多分にシルバリング (Silbering 1924) の根拠のない解釈に基づいていた。意味論的争いが起こった (Angell 1926, 45; Viner 1937, 132-34)。だが、「ここで彼 [スミス] は、『流通は新しい車輪によって営まれているばかりか』、その車輪はそうした車輪が作られるのが常であったものとは全く異なる種類の材料からなると述べるだろう。彼はこう言うだろう。すなわち、わが国の通貨は確かな本位 (*standard*) から不安定なそれへと変化した…」(Boyd 1801b, 66. 強調は原文, [] 内は追加) という文脈に明らかなように、「本位の明確な貶質」とは、通貨本位の金からそれ自体無価値な紙券への移行を指しているに過ぎない。

²⁶ 「…イングランド銀行は、現金支払停止期に空前の利潤を上げていたが、他方、私的な一企業として、同行はこの利潤に対する法的道徳的権利を全く問題ないものと見なしていたので、種々の方面に大きな憤激をもたらした。…現金支払停止期のインフレーションがもたらした加熱により、資本利潤率は銀行利子率を上回る傾向を見せ、累進的な借入需要を生んだために、イングランド銀行は、金属準備をはるかに上回る負債の過剰発行を行ないつつ、手形割引の増加とインフレーションの進行との双方から膨大な利潤を獲得したのだった」(佐藤 1999a, 8)。

ポイド = ベアリング論争(1797-1801)

地金論争の源流とその余波

(佐藤有史)



1790-1825 年(年平均)における, イングランド銀行の発券量ならびに預金(M), ハンブルク宛為替相場(X), 物価水準(P) (各 1790=100)。

図1 ウッド(Wood 2005, 16)による百分率評価

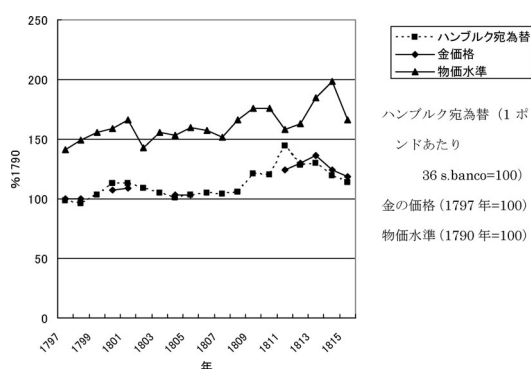


図2 ホートリーによる百分率評価(Hawtrey 1928, 335より作成)

る誤った統計と誤った推論とに基づいたポイド批判を繰り返す解釈者が出るはずはなかった。ポイドは、インフレーションの源泉を、兌換性を免れたイングランド銀行

券の過剰発行に見た(図1および図2を見よ)。猖獗を極めた地方銀行券の氾濫は、そうしたイングランド銀行券の上部構造として寄生した徒花に過ぎない²⁷。

IV ベアリングのポイド批判

IV.1 サー・フランシス・ベアリング(1797)

ベアリングがイングランド銀行現金支払停止後に出版した2冊のパンフレット(Baring 1797a, 1797b)が、「通貨理論への貢献としてはその意義はゼロであった」(Hollander 1911, 444)という評価から、「スミスから地金論争にいたる注目すべき一経過点にほかならなかった」(中村 1963, 26)という評価まで大きく揺れるのは、それらの分析内容が、解釈の余地を大きく許す非常に曖昧なものだったからだ。それらは、イングランド銀行券と政府紙幣(ベアリングは政府証券の含意を持たせる)の違い(Baring 1797a, 10-12)、脆弱な信用基盤しか持たない地方諸銀行の発券を禁じること(18-9)、戦争中はイングランド銀行の現金支払停止を継続するためにも同行銀行券を法貨とすべきこと(66-69)、同行の利潤動機や政府の影響力を抑制するために何らかの管理がなされねばならず、そのためには当時流通していた同行銀行券をあまり超えない発券量が望ましいこと(72-3)、そして同行の現金支払停止は、同行が倒産・破産の域を越え支払不能の一步手前まできたためであること(Baring 1797b, 16)などを、分析というよりはメッセージとして伝えたという観が強い。だが私は、少なくともベアリングの第1パンフレットには、管見の限り研究史上ほとんど触れられることのなかった、攻撃的的がひとりいたと考える。それは、ポイドであった。

第II節で述べたように、ポイドは1794年初頭にビットと知り合いになったが、翌1795年には早くも「1,800万ポンドの...公債が無競争でポイド = ベンフィールド社に与えられ」(Ricardo 1951-73, Sraffa's annot., 10:75 fn. 1)、その上オーストリアへの「皇帝債」のロンドン市場での起債460万ポンドを一手に任せられ、「この年度における Boyd, Benfield & Company の活躍は刮目に値」(千田 1992, 167)した²⁸。ポイドはこうしてまさに1795-99年における最も傑出した公債引受業者として突如シティに現われたのだ。

ポイドは自前で取引を行なう公債引受業者だった。

新しい公債の発行が予想されるや否や、それに入札しようと思ひ、応募者名簿を作成しつつあった人々は、

²⁷ ポイドは『書簡』初版後に地方銀行券問題への一層の言及の必要を求めた友人からの書簡を第2版付録Fに掲載し(Boyd 1801b, esp. App. to 2nd ed.: 42-3)、また本文への注にも本稿の趣旨に沿って追加した(fn. to 2nd ed.: 19-20)。なおシルバリング = エインジェルの誤りについてはさらに Pressnell (1956, 180-89)も見よ。

²⁸ 千田(1992, ch. 5)は1793-1820年におけるイギリスの公債発行とその入札引受業者たちに関して貴重な情報を与える。またポイドが関わった1795年および1797年(162万ポンド)の「皇帝債」については何より Helleiner (1965)を見よ。Cope (1983)、さらに貴重な統計数値を与える Sherwig (1969)も見よ。

その公債のために市場を「整え」始めるのが慣例であった。これは、彼らの所有する証券を売り払うことに基づいていたし、また彼らが所有していない証券を売ることに基づいていた。こうした売却は、新しい公債をできる限り安価に手に入れることができるように、契約日に備えて価格を下落させた。彼らは、彼らが売却した証券の代わりに、その公債の自らの割当分を持ちたがった。したがって、この段階では公債の弱気筋が引受業者志願者であった。その後になって引受業者と応募者は徐々に投資家の間に新公債をさばいた。この過程において、彼らはイングランド銀行から援助を受けたのであって、同行は、応募者が最初の2, 3回の分割払込金を払い込んだ後に、それに続く分割払込金を援助するために前貸しするのが通例だった。(Ricardo 1951-73, Sraffa's annot., 10: 77-78. 強調は追加)

このスラッフアの入念な注解は、ボイドからリカードウまでの公債引受業者たちの実態を知る上で最も重要なもののひとつである。時代の寵児となったボイドは、請負シンジケート団にそれぞれの割当分の公債を配分してなお相当の持高があったので、当然に他の入札引受業者たちがそうしたようにこれを担保にして入札の割賦金をイングランド銀行から借り入れようとした。だが1795年後半以降徐々に不利に転じた為替相場を理由として、イングランド銀行は貸出を極度に引き締め、しばしば拒否し、シティに大きな不満が生じていた。そしてボイドは、こうしたことを自らに対する「陰謀」(Cope 1983, 99)と見なし、1796年にイングランド銀行と競合する新たな大銀行設立構想の中心人物となった(Boyd 1801b, App: 2 ff.)し、このことが、彼のイングランド銀行不信への主因となったのである。

さて、ヨーロッパ大陸および北米との貿易金融取引での成功、ならびに1779年からの東インド会社との深い関わりの中での准男爵位の取得によって知られたサー・フランシス・ベアリング(1784-1802年に下院議員)は、ボイドがシティに突如登場した時には50台半ばだった。彼はこの新興勢力を注意深く見ていたに違いない。そしてこの勢力の行き過ぎた台頭のうちに、彼は1797年のイングランド銀行現金支払停止のひとつの遠因を見た。

²⁹ その後の夥しい研究がホートリーの主張を受け入れてきた(e.g., Clapham 1944, 1: 267-69)が、ところでホートリーのこうしたベアリング批判は、シルバリング批判でもあった(Hawtrey 1928, 324-25)。

1793年の後半6ヶ月間、1794年全体、そして1795年末までは、貨幣は平時と同じくらい豊富であった。しかしその時若干小さな兆候が現われ始め、それは1796年の春に非常に大きくなった。以前の諸戦争では、その年度の公債を引き受けさせるために、最も立派な金融業者たちは力を持っているので自ら果たそうと企てた約束を支え、成し遂げるだろうと考えて、彼らと連携するのが大臣たちの慣例であった。この場合には、そうした力を持たない一組の紳士たちが大臣[ピット]によって選ばれた。彼らは、支払を履行できるようにするために、流通(circulations)、外国での操作、ならびに他の便宜に頼った。こうしたことが為替相場に若干の影響を及ぼしたが、しかしわが国の金利にはさらに大きな影響を及ぼし、それは間もなく、法律によって受け取られることが許されている上限を上回るところまで押し上げられた。...わが国から、長期間続くことなどあり得ないほど地金および鑄貨を流出させた、何か強制された異常な操作があったに違いないが、この流出は、何らかの他の副次的事情によって助長されたとはいえ、大きな程度で皇帝債によるものだった。(Baring 1797a, 46-7, 49-50. []内は追加)

もはや明らかなように、この、力がなくて若干いかがわしい「一組の紳士たち」とはボイド = ベンフィールド商會を指し、そして彼らが主導した皇帝債がイングランド銀行の準備を枯渇させて1796年の信用収縮(ひいては1797年の兌換停止)の間接的一因となったとベアリングは指弾したのである。そしてもちろん、ベアリングは首尾一貫して、ボイドによる1796年のイングランド銀行に競合する大銀行の設立案を執拗に攻撃した(36-42)。

だが、こうしたベアリングの攻撃は、今日から見れば非常に一面的だった。なぜなら、まさにベアリングの上の文章の一部を引用しつつ、「為替の攪乱は、1796年の戦時公債が発行されるずっと以前に起こった」、というのも、1795年の初めに事実上無価値となったアジニア紙幣に代えて金本位への復帰を決定したフランス政府のゆえに、「フランスに金を送ろうとする圧力」こそがイギリスの為替相場を押し下げ、イングランド銀行からの正貨流出を引き起こしたからだと批判したホートリーの主張(Hawtrey 1928, 324-29)こそが、今日の定説だからである²⁹。その大部分が地金ではなくて為替手形で送金された460万の皇帝債(Cope 1983, ch. 5)が、一国の為替相場に言われる圧力をかけたはずがなかった。

ポイド = ベアリング論争(1797-1801) 地金論争の源流とその余波 (佐藤有史)

むしろ、外生ショックによる対外流出に直面し、それを口実に不必要な割引制限を商人間で差別的に(とポイドは多少正当に感じていた)行なったイングランド銀行の信用政策へのポイドの不信は、実は当時広く共感を得ていたのだ。例えば、1797年の議会の両院委員会の証言者として立ったヘンリー・ソーントン、ポイドのみならずシティの多くの商人たちを苦しめたイングランド銀行の1795年以後の信用収縮に直面し、こう述べた。

イングランド銀行券を新しい流通媒介物で代位させようとする試みは、もし不成功だとしたら、追加的な不信を生み出す見込みがあるでしょう。他方、万一それ[ポイドの競合銀行設立案]が成功して、かなりの程度まで推し進められるとしたら、イングランド銀行券の量が少な過ぎることから生じてきた害悪はすべて、もちろん取り除かれるでしょう。仮に支払が首都で容易になされ、不安が取り除かれるとしたら、私は、新しい紙券の創造という事情は、イングランド銀行の紙券量が不足しているのは認められているのですから、全般的信用にはそれほど損害を生み出さないかもしれない、と思いますが。私は、私が言及してきました[ポイドの]計画案は、世論における性急な動揺をそれほど伴わずに、また議会制定法が可決される間に引き起こされる未決状態を伴わずに、実行されたはずだと思います。(Thornton [1797] 1939, 309; cf. *ibid.*, 280, 282, 297. []内は追加)

それゆえポイドは、1797年の現金支払停止も、1795年

12月からの異常な信用収縮も、ともにイングランド銀行の誤った経営の結果であると同行を指弾する『書簡』中のある箇所で、ソーントンの名を挙げつつこう述べたのである。

1797年2月26日の枢密院令をもたらした諸原因についての上院委員会における、ヘンリー・ソーントン殿ならびに私の証言を見よ。その性質においてこれほど抽象的な主題について、その当時は互いに知りもしなかった二人の意見が著しく一致していることは、双方の当事者の多くの友人たちの心を打った。(Boyd 1801b, 78 fn.)

ポイドはその後、金融市場で孤立の度合いを深め、「1799年まで市場はウィリアム_[ママ]・ポイドによって支配されていたが、しかし彼がその年の初めに困難に遭遇した後、ベアリングズ商会が先頭に立った」(Ziegler 1988, 58)。いやそれどころか、事実問題として、サー・フランシスが公債引受業務に参加したのは、ポイドの没落を待つように1800年度が初めてだった(千田 1992, 182)。そして19世紀の最初の15年の公債市場の覇の争いは、今度はリカードとベアリングズ商会との間のそれへと移行していったのである。

IV.2 ベアリングのポイド批判(1801)

『書簡』が集めた広範な注目は、イングランド銀行および政府の双方にとって厄介だったに違いない、また多くのポイド批判のパンフレットが書かれた。ポイド自身、『書簡』第2版に追加した諸注の中で多くのそれら応酬に言及しているが³⁰、たぶんその中には買収された著者たちによるものもあったに違いない(Boyd 1801b, fn. to 2nd ed.: xvii)。そうした応酬の中で、最も著名なのはベアリング(Baring 1801)³¹によるものである。

ベアリングは、自らの批判の初めの方で、まず次のような前置きを述べる。

ポイド氏の『書簡』のかなりの部分が、争う余地のない諸事実ならびに諸原理を含んでいる。すなわち、聡明な人であれば、紙券流通が合理的で適正な限界(reasonable and proper bounds)を大きく超えて押し出される時には、地金がかかなりの程度で消失し、(食糧を含む)ありとあらゆる商品の価格が影響を受けるに違いないということを疑うはずがないのだ。このことは、少しも新しい発見ではない。それは、一世紀以上もの

³⁰ ベアリングのものの他にポイドが唯一書名を挙げて反批判しているのは、匿名著者による『簡潔な所見』(Anonymous 1801)である。同書は、『書簡』を「フランスでむさぼるように読まれるだろう」(10)ような、「フランスの新聞に勝利のネタを与える」(25)愛国心のかからも書物として描き、主にポイドの執筆動機を疑うことに終始する、分析的価値のほとんどないものだった。

³¹ ベアリングによるポイド批判については本稿とは別視角の紹介が既に渡辺([1966] 1984)にあり、それは、イングランド銀行券は過剰ではない、イングランド銀行券の過剰が食糧価格を上昇させたのではない、ポイドの説によれば、むしろ現状では通貨は不足していることになる、以上の3点からなるとする(64)。そして結論部で、ベアリングは『書簡』で言われていないことを批判しているとのポイドの反批判を承け、実質的に「ベアリング卿の批判はどれだけの意味をもったことになるであろうか」(80)と結論づける。

間, ありとあらゆる金融業者および商人のイロハというか, 第一原理だった。(6)

そうだとすれば, ペアリングのボイド批判は, 論理的にイングランド銀行券は「合理的で適正な限界」内にあるということの証明に努めねばならなかったはずだ。そして当の「限界」とは何かを明確にすべきであったはずだ。だがまさにボイドが批判したように, ペアリングはこの「限界」を, 「読者に推測するに任せた」のであって, 「こうした性質の議論にとってはあまりに曖昧で漠然としている」(Boyd 1801b, pref. to 2nd ed.: x. 強調は原文)。

その代わりにペアリングが集中したのは, ボイドが挙げた 1793–95 年のイングランド銀行券の平均流通高 1,197 万 5,573 ポンドと 1800 年の 1,545 万 970 ポンドとの差額 350 万ポンドが, ボイドの言うように食糧を始めとする物価の騰貴を引き起こすに十分な額か否かということと, ボイドが『書簡』の付録に敢えて入れた 1796 年の新銀行説立案への執拗な攻撃であった。ここで後者の批判については, 「流通紙券の過剰を強く批判している…ボイド氏の意見は, 彼の付録の中に見出される案と全く矛盾をきたしている。そこで彼は, 既に流通している紙券の塊に相当に追加するためだけに新しい銀行を設立することを提案している」(Baring 1801, 31)といったペアリングの批判に, ボイドは, イングランド銀行の誤った経営方針 今日的に言えば, 利潤動機に沿った循環増幅的な信用政策 を例証するためにこそ当該の付録をつけたことを明らかにして一蹴している(Boyd 1801b, pref. to 2nd ed.: 1–1ii)点を確認しておけばよいだろう。私は早速, 前者の問題に移ろうと思う。

ペアリングはあくまでも既存のイングランド銀行の信用政策を擁護した。

…私は, 私がイングランド銀行をありとあらゆる種類の財産の最後の類みの綱(the sheet anchor)と見なしている間は, ありとあらゆる折に同行を支援するために喜んで私の最善の努力を尽くそうと思う。…大臣がほぼ 3 億ポンドの国債の追加から生じたわが国の繁栄の

増大をあれほど大いに満足して熟考しているのに, ボイド氏は, 飢えと破滅の見込みとを, その紙券流通への 350 万の追加のせいにするのである。私は, 何十億がわれわれにとってこれほどありふれたものになっている時に, 彼のうちにこれほど細部にこだわる計算家を見出すとは本当は予想していなかった。(Baring 1801, 8, 10–11)

1797 年の 2 つのパンフレットで強調されたペアリングのイングランド銀行 = 「最後の抛り所」論は, 今や「この局面では偶像崇拜」(Horsefield [1944] 1953, 23) となった³²。ペアリングは, 「地金, 紙券, ならびに為替相場は相互に規制し合う」(Baring 1801, 18–9) ことは認めつつも, ボイドが不運にも食糧価格を主対象に採り上げてしまったことを念頭に, 「外国が替はわが国で栽培された穀物の価格に何の…効果も与えない」(20) と誇らしげに語り, またイングランド銀行券は平価で流通しており, 「どんな人であれ, 彼が販売する財につける価格が金で支払われようとイングランド銀行券で支払われようと, 少しもかまわないだろう」(21–22) と主張する。だからイングランド銀行の信用政策については, ペアリングは, 「イングランド銀行によって発行される紙券は, 必要(wants)を, そして公衆の便宜をすら, 超過することは一度もなかったし, またそれが食糧価格の上昇を少しでも生み出すように作用することはなおさらなかった」(9) と, 真正手形学説(「取引の必要学説」(佐藤 1999b, 136–38))の一步手前まで進みながら擁護を強弁した。現実の不作によって加速された食糧価格の騰貴傾向に言及されていないのも少々驚くが, ペアリングは, 現実の金の価格ならびに為替相場の動向をも不問に付したと言わざるを得ない(図 1 および図 2 を見よ)。また流通内に金鑄貨が存在していたこの時期には, 過剰によって通貨の減価は「そうした通貨の一部として依然流通し続けている少量の鑄貨にまで等しく及んでいる」(Boyd 1801b, pref. to 2nd ed.: xl)。現実には紙券タームでの価格と金タームでの価格との「二重価格」(銀行券の割引)が顕わになるのは金が流通からほぼ消失した時で, そうした事態は 3 年後のアイルランドで現実が生じることとなった(佐藤 2006, 91–93)。

ペアリングによるボイド批判は, 直ちに同時代の人々にペアリングをイングランド銀行の擁護者だと断じさせたし(King 1804, 16), 後の諸研究がそれを「イングランド銀行の擁護者によるボイドの莫名其ろの結論に対する精力的な, しかし論理的にかなり弱い批判」(Angell 1926,

³² さらにペアリングは言う。「イングランド銀行は, 大ブリテンの農業, 商業, 財政にとっての太陽である」(Baring 1801, 15)。ボイドはすぐさま揶揄して, ペアリングは「ほぼ 3 分の 1 [350 万ポンド] におよぶ太陽の熱の上昇が, 地球にいる動植物にもたらす影響を見積もるのを忘れている」(Boyd 1801b, pref. to 2nd ed.: xxii. [] 内は追加) と応えた。

ボイド = ベアリング論争(1797-1801) 地金論争の源流とその余波 (佐藤有史)

44 fn. 3) と見なしてきたのももっともだった³³。だが、こうしたボイド = ベアリング論争は、19 世紀古典派貨幣理論の発展の重要な出発点を与えることとなった。すなわちそれは、銀行券発行の「合理的で適切な限界」、それが侵犯されつつあると判断すべき指標としての地金の価格ならびに外国為替相場、そして、イングランド銀行券の増加が全信用メカニズムに及ぼす複雑な影響、以上の分析の端緒を与えたのだ。実際、ベアリングが 1793-95 年の平均 1,200 万ポンドから 3 年後の 1800 年の 1,550 万ポンドへの 3 分の 1 もの、否、高々 350 万ポンドの増加はほとんど影響を与えないと批判したのに対して、ボイドが次のように応じていたのは、ボイドの能力の高さと、その後の課題の双方を示していた。

[ベアリング] はますます大きく驚きながら、350 万の取るに足らないイングランド銀行券の流通の増加が食糧ならびに他の諸商品の価格のかくも大きな騰貴の主因として割り振られていると、長々と話す... 仮にサー・フランシスが、かくも深刻で重要な主題に必要とされる注意ならびに思索をもって、私の推論を注意して聞いていたとしたら、彼は私のことを、イングランド銀行券の量の単なる増加に全般的物価騰貴を帰したとは表現しなかったはずだ。そうした騰貴に対してその推論が帰しているのは、量の増加、そうした増加が実行された期間の短さ、その構成の変化、ならびにそうした増加および変化がそれに基づいている紙券の全上部構造に及ぼす影響、以上の結合した作用なのである。(Boyd 1801b, pref. to 2nd ed.: xiv-xv. 強調は原文、[] 内は追加)

³³ 先に言及したハイエクの評も見よ。全く正反對の評価がフェッターによって与えられたが、同意できない。「翻ってベアリングは、自らのボイド批判を商品価格の議論に集中させた。ハンプルク為替の相対的に小さな価格騰貴ならびにギニー貨には少しもプレミアムがついていないことを...、商品価格の鋭い騰貴と対比することによって、彼は、正貨兌換性を貨幣流通の適切な基礎と見なしてから次に食物価格の騰貴を過剰発行の証拠として引き合いに出すというボイドの議論の弱点を、さらけ出した」(Fetter 1965, 32)。

³⁴ ソーントンはただ一箇所、イングランド銀行と「政府の銀行」との区別に関して、イングランド銀行は政府から独立して政府への貸出条件は公衆に対するそれと変わらないという論点でベアリング (Baring 1797a) の名を引き合いに出す (Thornton [1802] 1939, 107 / 訳 84)。

そしてベアリング自身が、最晩年の 1810 年に公に姿を現わして通貨問題を語った時、ある重要な変遷を遂げていたのだ。だがそれに触れる前に、こうしたボイド = ベアリング論争が及ぼした重要な地金主義者たちへの直接的影響について触れておこう。

V ソーントンの、キング卿、ホーナー

V.1 ソーントンの

先に触れたようにソーントンは、しばしば、ボイドの『書簡』を自らの批判対象とし、『紙券信用論』を書き著したと言われてきた (Hayek 1939, 44)。だがこうした判断には注意が必要である。これも既に触れたように、ソーントンは、1797 年段階では、イングランド銀行券の収縮が経済活動を停滞させたことから、イングランド銀行券の発行は必ずしも需要決定的でなく、それとは別個の信用管理が必要であること、さらにイングランド銀行券の収縮が公債価格を低めたことなどから、ボイドによるイングランド銀行を補完する (しかし競合的な) 大銀行設立案の根拠の合理性を認めていたからである。

そしてソーントンが『紙券信用論』第 8 章で、通貨の過剰の指標としての地金の市場価格ならびに外国為替相場の状態を認め、さらに地方銀行券の量がイングランド銀行券の量によって規制されることを認めた上で、その双方について理論的洗練を加えた点だけをとってしても、彼は明確にボイドの後継者であった³⁴。なるほど、ソーントンは 2 点でボイドの名を挙げて批判した。その第 1 は、III.3 で見たように、通貨の定義に関わるものであった。

ボイド氏はイングランド銀行の発行問題についてピット氏に建白した彼の公刊物の中で、諸手形をわが国の流通媒介物の一部と全く見なさないという、他の多くの人々が陥ってきたのと同じ誤りを広めている。(Thornton [1802] 1939, 92 fn. / 訳 64)

だが、こうした批判は、ボイドが預金通貨を認めていた点で厳し過ぎた。なぜなら、為替手形の振出と決済は、当然ながら商人たちの当座勘定の動きに包摂されるからである。

第 2 のボイド批判は、まさにボイドにとっては 10 分の 3 もの、しかしベアリングにとっては「高々 350 万」の、イングランド銀行券の膨張の判断に関わっていた。

すなわちソーントンによれば、1793-95 年のイングラ

ンド銀行券の平均流通額 1,197 万 5,573 ポンドを、1800 年の同 1,545 万 970 ポンドと比較すると約 350 万ポンドの開きがあるが、このうち 200 万ポンドはギニー貨に代位した 1 ポンド券、2 ポンド券の小額銀行券なので、純粋な追加は 150 万ポンドに過ぎない。これは軽微な過剰を示すに過ぎず、1801 年の報告によればイングランド銀行は前年比 150 万の削減をしたとのことだから、再び 1793-95 年の平均額にちょうど一致したと言う。そしてここに注を付して、「イングランド銀行の現金支払停止の前後に流通した同行銀行券の比較量のこうした説明は、ボイド氏のものとは非常に異なる」(214 fn./訳 231) と述べたのである。この第 2 の点こそは、ボイド = ペアリング論争の、ソーントン、キング卿ならびにホーナーとの間における論争の継続を標すものである。なぜなら彼らはみなこうしたボイドの数字から出発し、ソーントンは銀行券の制限とそれによる為替相場の安定には兌換性は必ずしも要件ではなく、それは現実の発券量の数字に裏付けられると主張し、他方キング卿とホーナーはそれに異を唱えたからである。

V.2 キング卿

キング卿こそが、まさに、地金の価格、為替相場の二点セットをもってイングランド銀行券の減価の指標と見なす、ボイドの全き後継者として現われたように見える。同書にはボイドの貢献を認める重要な注があり、それは全文引用されるに値する。

地金の価格と為替相場という 2 つのテストに基づいた通貨の貶質の証拠は、ボイド氏によって 1800 年 12 月「ママ」に出版された彼の『ピット氏への書簡』の中で強力かつ成功裡に主張された。だが彼は、減価の程度を過度に主張することによって、またそれが生み出してきたように思われるもの以上の物価への大きな影響をイングランド銀行券の過剰に帰すことによって、彼の反対者たちに有利を与えたように思われる。自らの立場を、短期において他のどれより大きな変動を被る物品であり、そしてあの特定の場合には一般的に認められていて否定し難かった食糧不足に主に影響を受けていた、穀物の価格騰貴によって例証する際に、彼はとりわけ不運だった。それでも彼の著作は、この重要な問題に公衆の注意を喚起するのに有益だったように思われる。その論争においてボイド氏に反対してきた商業界の名士たちにもかかわらず、彼の一般的推論は反駁されていないままである。それどころか、

サー・フランシス・ペアリングならびにソーントン氏の両者は、何の実際原則もしくは制限の基準も述べることができないまま、イングランド銀行券の発行に対する何らかの制限の必要を認めることによって、ボイド氏の議論の十分な力を認めてきた。(King 1804, 32-33 fn. 強調は原文)

だがソーントンもまた、このキングの注に重要な評注を付して次のように述べたのである。

ボイド氏は彼のピット氏への書簡の中で、紙券の金への不換性こそが、彼がパンの高価格を「他のどの原因にも増して」説明するほど大きいと仮定した減価の原因であると主張した。彼は、紙券の過剰が引き起こした騰貴の程度を、彼はそうすべきであったのに為替の変動によって測定しなかったし、また彼は、紙券の金へのこうした不換性は必ずしも紙券の減価を生み出すわけではなくて、それが過剰になるまで発行させるように紙券発行を促進するのに都合がよい場合に限り、減価を生み出すのだとは考えていないように思われる。制限されており、十分に信用されている不換紙券は、まさにそれが兌換可能であるかのように、その価値を維持するかもしれない。(Thornton [1804] 1939, 316-17. 強調は原文)

だからソーントンは、ボイド(それゆえキング卿)はもっぱら兌換性のみをこたわり、重要なのは外国為替相場を考慮した数量制限であって、この条件が満たされれば不換紙幣ですら価値を維持するということを無視していると批判したのだ。そうした不換紙幣の過剰のテストを与えるのは何より外国為替相場であった(*ibid.*)。

キング卿およびホーナーは、そうしたソーントンの議論の所在を既に『紙券信用論』中に嗅ぎ取ったに違いない。彼らは、兌換性という「合理的で適正な限界」を定める条件以外にイングランド銀行がいかにして発券を制限し得るか、執拗にソーントンの議論を点検したのだ。キング卿は、1789 年から 1803 年までのイングランド銀行発行量とハンブルク宛為替、銀地金価格などの一覧表を巻末に掲げた上で(King 1804, 171-77)、「正貨支払制限以来の地金の価格ならびに為替の状態の変動は、概して、イングランド銀行券の量の変動ときわめて著しい程度で一致してきたということがわかるだろう」(37-8)と結論づける。

ボイド = ペアリング論争(1797-1801) 地金論争の源流とその余波 (佐藤有史)

そしてソーントンもまた、『紙券信用論』の見解について重要な修正を行なった。

ているのではないかと思う。(Thornton [1804] 1939, 317 317-18. 強調は追加)

キング卿は、海外に運ばれたか退蔵されたかした金の代わりに流通した、それゆえいかなる影響も与えないはずの 1 ポンド券および 2 ポンド券の発行によって、イングランド銀行券になされた追加を考慮に入れている。彼はまた、金地金の価格ではなくて、銀地金の価格によって減価を算定し続ける。前者は、私の信ずるに、その鑄造価格を 10 パーセントあるいは 11 パーセント上回することは一度もなかった。だが私は、おそらくこの頃には若干過剰なイングランド銀行券の発行があったかもしれないということについては、キング卿に同意する。…付録の諸表からは、若干一般的な一致が明らかである。キング卿が、イングランド銀行券の量を述べる際に、1 ポンド券および 2 ポンド券の量を区別しなかったのは遺憾である。支払制限以前は、こうした種類の銀行券は存在しなかった。その後しばらくして、それは 200 万に達し、最新の提出された報告によると 400 万に達した。さらに、イングランド銀行券は今、地方における諸銀行によって金の代理を務める資金として保有されているということが、考察されねばならない。他方私は、ロンドンにおいてはイングランド銀行券の使用における節約が絶えず高まっ

『紙券信用論』の時期のソーントンの大きな見過ごしは、小額銀行券はいつでもギニー貨に代位するに過ぎない銀行券の「非」純増分であると想定したことだ。兌換性の範を免れた小額銀行券は、いったん発行されたら最後、ギニー貨との兌換によって回収されるまで延々と流通内をさまようという点で高額銀行券よりずっと危険性を孕んだ存在だった。小額銀行券は、1804-1808 年の間は 400 万ポンド台の発行だったのが(表 1 を見よ)、その後急激に増え続け、1809-1816 年には 500 万から 900 万ポンドへと増大していった。

V.3 ホーナー

ホーナーは彼の有名な『紙券信用論』の書評の末尾において、1795 年までの 3 年間のイングランド銀行券の平均流通高 1,197 万 5,573 ポンドに対して、1800 年 12 月に達した 1,545 万 970 ポンドというボイドが挙げた数字から、ソーントンによる小額銀行券 200 万ポンドの控除の必要という主張を取り上げ、その結果生じた 147 万 5397 ポンドの過剰分を 1801 年春にイングランド銀行は回収したというソーントンの説明をいったんは受け入れる。そしてそれは、ボイドの『書簡』が同行に与えた衝撃のせいであつたと示唆したのだった。

表 1 イングランド銀行券流通高 (BPP 1819, 281 より作成)

	£5 以上高額券	£5 未満小額券	銀行郵便手形	計 (£)
1793-95 年 2 月期平均	11,276,173	(存在せず)	612,317	11,888,289
1800 年 2 月	13,106,368	1,406,708	723,600	15,236,676
8 月	12,221,451	1,690,561	823,366	14,735,378
1801 年 2 月	12,975,006	2,647,526	954,982	16,577,514
8 月	11,715,665	2,495,386	759,270	14,970,321
1802 年 2 月	12,038,970	2,616,407	803,499	15,458,876
8 月	12,801,746	3,312,790	772,577	16,887,113
1803 年 2 月	11,796,424	2,960,469	848,894	15,576,932
8 月	12,413,924	3,846,005	743,841	17,035,959
1804 年 2 月	12,054,943	4,673,515	1,029,580	17,577,352

そして、ボイド氏のパンフレットは1800年12月31日「ママ」に出版されたことを記憶する人々には、この日の直後の3ヶ月間にイングランド銀行が150万ポンドの同行銀行券を回収するのを便宜と考えたということは、かの紳士が自らの推論の確証としてもっともらしく主張するかもしれない事柄だと間違いなく思いつくだろう。(Honer [1802] 1957, 55 / 訳 356)

だがホーナーは、キング卿の著書の書評において、そもそもイングランド銀行による発券量の動き自体が、ソーントンによる説明とは異なるのではないかと主張するようになった。ホーナーはこの書評で、キング卿がボイドの理論に一致すること、そしてそれをさらに正確にしたことを認めつつ(Horner [1803] 1957, 77)、そこからソーントンによるボイドによるイングランド銀行券の増加の誇張という批判を取り上げて反批判し、明らかにボイド＝キング卿の側についたのである。

彼「ソーントン」は、1800年に「発行額」が1,545万970ポンドに達したことがわかったと認める。だが次に彼は、同行の総裁は翌春に下院に対して同行はその額の約150万を回収したと申し立てたと述べ、ゆえに200万の小額銀行券も差し引けば、支払制限以前の平均発行額にほぼ正確に等しい額が残ったと述べる。だが...われわれは、これは事実の正確な申し立てであるどころか、1801年春には発券は1,636万5,206ポンドに達したのを見出すのである。これは1802年夏にはさらに増加して1,674万7,300ポンドに達した。下院に提出された最後の報告によれば、流通内のイングランド銀行券は1,610万7,300ポンドに達した。この額を1795年12月に終わる3年間の平均と比べてみると、われわれが後者に、ソーントン氏が語り、また非常に大きな斟酌だと思われる200万全額を加えてすら、イングランド銀行からの現在の発行は、以前正貨に兌換できたものを、全部で6分の1を多少下回る分だけ超過しているのがわかるだろう。もしわれわれが、紙券には速やかに流通する余地があることや、流通速度の加速化が通貨の有効な力に与える増分を考慮するなら、こうしたおよそ6分の1の追加は、有効な通貨の塊の計

³⁵ このベアリングの証言は、リカードウによる地金報告に対する評注の中でも取り上げられているので、そのごく一部は日本語でも読める(Ricardo 1951-73, 3: 370-73)。リカードウは、ベアリングが真正手形学説批判において地金委員会側に立つことを記した。

り知れない増加と見なされねばならない。(86. []内は追加)

こうしてホーナー 彼の数字は、表1に見られるように現実の数字に近かった は、(種々の重要な理論的相違があるのを別にすれば)兌換性なき制限原理は危いという点でボイド＝キング卿の側につき、そしてこれもまた重要なことであるが、ソーントン自身もキング卿、ホーナーらの批判に直面し、自らの議論の再考を始めることとなったのだった。

VI サー・フランシス・ベアリング(1810)

さて、サー・フランシス・ベアリングは、最晩年の1810年に地金委員会で証言を行なった³⁵。この証言で、ベアリングは今やイングランド銀行の兌換再開を強く求めるに至った。

ベアリングによれば、かつての兌換制下での諸戦争では、為替下落は経験されなかった。

七年戦争の間、貿易には全く規制がなく、陸海軍の軍需品の増大した量に支払うためにわが国から貨幣を大陸に送金するという同じ操作が行なわれましたが、それでもただの一回も地金が不足したことはありませんでした。アメリカ戦争でも実情は同じでした。その全体を通じて地金の不足はありませんでした。...私はですから、為替に影響を与える2つの大きな事情は、貿易に対する規制と、地金不足を生むようなわが国の紙券流通の増加だと見なしております。(Baring [1810] 1951, 123)

すなわち、開放経済下では通貨の過剰のみが為替を下落させるのである。そして1810年現在、明らかに通貨は過剰であった。

... 1797年に、またそれに先立つ何年かは、イングランド銀行券の発行はせいぜい1,100万ポンドでした。私は、議会で提出された1枚の印刷された紙を見ました。それには、イングランド銀行券の現在の流通は2,100万ポンドを超過していると書いてあります。私は断固として、それはわが国の一般流通にとって安全に流通し得るものを超えていると考えるものです。... 1世紀以上もの長い経験が...示すのは、公衆が信頼をもって依拠し得る唯一の原理、すなわちそうすることがイン

ボイド = ペアリング論争(1797-1801) 地金論争の源流とその余波 (佐藤有史)

グランド銀行にできる時にはいつでも、再び正貨支払に復帰すべしということです。(124. 強調は追加)

こうしたペアリングの証言はキング卿が「サー・フランシス・ペアリングおよび他のイングランド銀行擁護者たち」(King 1804, 16) と擲論していたかつての姿からは想像し難かったし、反地金主義者たちには衝撃をすら与えるものだった³⁶。さらに小額銀行券について、

小額銀行券も同じく紙券であり、それらは以前に流通していたイングランド銀行券の塊に追加されます。それらは、公私の有価証券と引換えに同じように発行されます。比較的地金から無視できるところか、それらはむしろそれらの然るべき割合以上に困難を増大させる傾向があるのではないかと私は危ぶんでいます。なぜならそれらは、同額の正貨の発行なしには回収できないので、それゆえそれらは戦闘の最前線にあるからです。(124)

最後に、1801 年のボイド批判ではペアリング自身もう少して陥るところであった真正手形学説について、長々と批判している彼の答弁は重要であり、引用されるに値する。

Q. もしイングランド銀行が、公衆の必要が要求するように思われる時に、真正な商取引に基づいた優良な手形の割引需要によって同行の発行を規制するとしたら、わが国の流通（地方諸銀行の紙券および同行自身の紙券）における過剰の可能性を有効に防衛するだろうとあなたは思いますか？

A. イングランド銀行の紙券は、1 世紀以上もの間確固たるものでしたし、この瞬間も変わらぬ信頼とともに繁栄しています。イングランド銀行に任された力は偉大であり、同行の紙券は、わが国の最良の利益が依拠

する土台です。それは、わが国の商業、財政、農業改良などなどの全体を生み出すのに役立つ種子なのです。そうした力は、イングランド銀行が同行銀行券に正貨で支払う義務がある限り、安んじてとどまるでしょう。なぜならそうした事情は、合理的で安全な限界(a reasonable and safe limit)を超えて流通を増加させたいという（万一起れるとして）気持ちに対する完全な反作用となるからであり、またそうした事情の下では、事物（外国為替など）は自らの適正な水準を見出すだろうからです。質問は、真正な商取引などに基づいた優良な手形について語る際に、あまりに一般的に過ぎます。商人として一本立ちして 100 ポンドも持たない事務員が、（支払制限以来）いわゆる優良な手形を（おそらく）5,000 から 10,000 ポンドの額まで割り引くことによってイングランド銀行から融資を受け取る多くの事例があります。そうした需要は、私は、イングランド銀行によって創造されたものであり、仮に支払制限が除去されれば存在するはずの正規な取引過程から生じたものではない、と見なしたい気がいたします。こうした事情は、もしわが国の流通は支払制限が除去されるまでは完全に安全ではあり得ないという私の意見に十分根拠があるとしたら、重要です。…私は、イングランド銀行は公衆の需要によって同行の発行を規制すべきであるという若干の人々によって抱かれている意見を、非常に危険だと思います。なぜなら、投機の需要は手段の不足によってのみ制限し得るからです。そして私は、イングランド銀行は、仮に支払制限が除去されれば、同行の現在の額の 4 分の 3 を上回るほど同行の発行を拡大する気にはならないだろうと思います。イングランド銀行に法律その他によって何か抑制を課するのは危険であることが分かるかもしれません。…しかし、万一議会在一つの意見を抱きたいと思ひになり、それをはっきりと宣言するとしても、私は、イングランド銀行には同行の責任において行動する十分な力が残されてよいと思います。(125. 強調は追加)

この証言の中でペアリングが「合理的で安全な限界」に言及しているのは、彼が、ボイドとの論争において鍵論となっていたものを少なくとも忘れなかった事実を物語っている。そして自身のボイドとの論争が生み出してきた余波の中でその後新たな主題となった真正手形学説への批判的言及は、ペアリングの思想の重要な転回を示している³⁷。このように、1810 年のペアリングとボイド

³⁶ 反地金主義者チャーマーズによれば、こうしたペアリングの証言は、彼自身が 1797 年に主張した現金支払停止の継続の主張に背くものであって、記憶力の衰えを示すどころか、さらに意に反して地金委員会によって二枚舌で地金委員会をごまかすように仕向けられたせいだった(Chalmers [1811] 1969, 51-4)!

³⁷ 真正手形学説はイングランド銀行「公認の」学説であり、地金委員会の証言でも同行総裁、副総裁ならびに商人たちが繰り返し主張した。そうした中で、1810 年のペアリングこそは、イングランド銀行の過剰発行を認めたごく少数の「委員会の結論の主たる支持者だった」(Ricardo 1951-73, Sraffa's annot., 10: 93)。

との間には、距離はほとんどなくなったと言わねばならない。

VII おわりに 論争の余波のその後

何事にも剽窃を見出したがるジョブリンは、1810年にはキング卿もボイドもソーントンも生きていたのに、有名な地金委員会は、彼らの理論を使いながら引用もしなければ証人に呼ぶこともなかったのはなぜかと憤る(Joplin 1932, 8)。ジョブリンの「義憤」もさることながら、1807–10年の間のボイドへの言及の急激な消失は注目されてよい。J. ウィートリーやW. ブレイクのような地金主義者たちは、もはや『書簡』に言及することはなかった³⁸。さらに重要なことに、リカードは、1793年以来証券取引所で自立した取引を開始しており(Ricardo 1951–73, 10: 67)、当然ながらボイドの名を知っていたはずなのに、ついに彼の名に触れることは一度もなかった。マカロックは、自らの稀覯本復刻シリーズにボイドを含めなかったばかりか、その『経済学文献解題』(McCulloch [1845] 1964, 168–9)において、ベアリングの2著(Baring 1797a, 1801)にボイド(Boyd 1801b)を挟み、各数行ずつの紹介を載せるだけの扱いを行ない、地金論争の端緒を不分明にしてしまった。その後19世紀後半を通じてイギリスではボイドの名は徐々に忘れられ、世紀末の『イングラン

ド銀行文献目録』(Stephens 1897, 31)等にかろうじて名を留めるのみだった³⁹。

だが、マクラウドによるボイドの多少詳細な紹介こそが、ボイドの貢献を温存し、20世紀にまで伝える強力な源泉のひとつになった可能性が大きい⁴⁰。マクラウドは述べた。

われわれには、この偉大かつ重要な真理〔紙券の減価の指標としての、地金の市場価格および外国為替相場〕の発見の功績が与えられるべき人は誰か、よくわからない。仮に彼にそれを発見した現実の功績がなかったとしても、ウォルター・ボイド氏は確かに、それを宣言し、それに公衆の注意を喚起した最初のひとりであった。それは、キング卿によってずっと有能かつ明確に、そしてそれほど明確ではなかったけれどもヘンリー・ソーントン氏によって彼の『紙券信用論』において、補強された。しかしながら、これら3人の著者たちに対してこそ、われわれがこれまで確定し得た限りで、通貨という主題において、天文学におけるニュートンの引力の法則と同じくらい重要なこうした原理を確立した功績が与えられねばならない。(Macleod 1855–56, 2: 110. []内は追加)

この文章は、同書最終第6版までそのまま残された(Macleod 1902-6, 2: 4)。マクラウドはアメリカ合衆国ではよく読まれ⁴¹、20世紀初頭にホランダーが著名な論文(Hollander 1911)を書いた時にも十分に利用された。既にシルバリング = エインジェルの時代には、「広範に読まれ、大きな同時代的影響力を行使したボイドの著作は、それ以後の論争が進展させることになった主たる路線の概略を定めた。非常に大きな程度において、後の著者たちは彼の分析を単に詳述したり、さもなくば彼が最初に明確に提示していたもろもろの結論を反駁しようと企てたりしただけだった。ボイドを理解することは、それ以後の支払制限期の論争の、必ずしもすべてというわけではないにしろ、その多くを理解することである」(Angell 1926, 46)という評価が定まっていた。そしてその後、シルバリング = エインジェルのひどく歪曲されたボイド = 地金主義者たちの像は、幸いなことにヴァイナー(Viner 1937)、ウー(Wu 1939)らによる若干の修正を受けるとともに、ボイドが地金論争の重要な端緒を示したという事実は、ヴァイナー後には既定のものとして定着したのである。

³⁸ ウィートリー(Wheatley 1807, 77, 191, 196 ff.)およびブレイク(Blake 1810, 25 / 訳 19)は1797年の秘密委員会でのボイドの皇帝債に関わる証言のみに触れる。ブレイクが『書簡』のボイドに触れたのは(45 / 訳 34)、ホナーのソーントン書評論文(Honer [1802] 1957, 34 / 訳 325)からの孫引きだった。

³⁹ スティーヴンズは、『書簡』(Boyd 1801a)のイングランド銀行の過剰発行批判を3行でまとめ、しかし7行にわたりボイドの1796年の新銀行説立案を紹介し、ベアリング(Baring 1801)はボイドのこの計画案を「巧みに批判」したとし(Stephens 1897, 30)、『書簡』の真の歴史的意義を不分明にしてしまった。

⁴⁰ シルバリングが地金論争研究の権威と見なした'Macleod, *Theory and Practice of Banking*, vol. ii; Sumner, *History of American Currency*; Andr  ad  s, *History of the Bank of England*; Cannan, *The Paper Pound of 1797–1821*, a reprint of the *Bullion Report*; a recent American reprint of the same *Report*, with introduction by Stuyvesant Fish (N.Y., 1920); and Alfred Marshall, *Money, Credit and Commerce*' (Silbering 1924, 404 fn. 1)の中で、ボイドに言及したのは唯一マクラウドのみだった。

⁴¹ 19世紀の最後の20年間のアメリカ合衆国で標準的な貨幣論のテキストとなったウォーカーは、マクラウド(ただし別書)もジョブリン(Joplin 1832)も引用し、ボイドに触れた(Walker 1878, 352–3)。

ボイド = ベアリング論争(1797-1801) 地金論争の源流とその余波 (佐藤有史)

だがボイドの『書簡』自体は、あまりに読まれることが少なかったと言わねばならない。それは、リカードウによるもの、ソーントンによるものの理論的洗練さを欠きはしたが、少なくとも金本位制のもとで貨幣理論の分析対象となるべきものを明らかにしたという点で、『国富論』から『紙券信用論』までの四半世紀のイギリス金融思想史にとって最も重要な貢献をなしたと言えるだろう。『書簡』は、(ヒュームの貨幣理論ではなくて)『国富論』の貨幣理論を19世紀古典派貨幣理論の発展の中に十分に保持する中継点をなしただけではない。紙券発行の「合理的限界」をめぐる、一方のキング卿 = ホーナーによる兌換性の強調、他方のソーントンによる外国為替相場を注視しての裁量的発行制限の強調という潜在的对立を見据えながら、リカードウがそれらを総合する形で自らの「地金案」を提示してゆくダイナミズムは、そうした潜在的对立を生み出したボイドの『書簡』とそれがもたらした論争の余波をある程度念頭に置かなければなかなか理解し難いところがある。さらに、預金通貨の取扱いその他の19世紀貨幣理論にいまに残された諸問題も既に、『書簡』のうちに少なからず含まれていたことも忘れられてはならない。それゆえボイドの『書簡』は、今一度、真刻に研究が進められて然るべき金融思想史上の非常に重要な著作なのである。

参考文献

- 中村廣治(1962)『F・ベアリング『イングランド銀行論』の一考察 中央銀行論の生成』『経済論集』(大分大)14(1):1-29.
- (1963)『フランシス・ベアリングの銀行券論』『経済論集』(大分大)14(4):1-27.
- 佐藤有史(1999a)『現金支払再開の政治学 リカードウの地金支払案および国立銀行設立案の再考』Study Series No. 41 (一橋大学社会科学古典資料センター).
- (1999b)『アダム・スミスと真正手形学説』『三田学会雑誌』92(1):135-58.
- (2003)『古典派貨幣理論 古い解釈と新しい解釈』『経済学史学会年報』44:98-113.
- (2006)『マルサスのニューアナム書評論文 「マルサスとアイルランド」 補論』『マルサス学会年報』15:73-109.
- 仙田左千夫(1992)『十八世紀イギリスの公債発行 公債発行と金融社会』啓文社.
- 吉澤昌森(1999)『貨幣理論と経済政策』見洋書房.
- 渡辺佐平([1958]1984)『ボイド『ピット閣下への書簡』』, 同著『地金論争・通貨論争の研究』法政大学出版局, 所収.

- ([1966]1984)『フランシス・ベアリング卿のボイド批判』, 同著『地金論争・通貨論争の研究』法政大学出版局, 所収.
- Angell, J. W. (1926) *The Theory of International Prices: History, Criticism and Restatement*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Anonymous. (1801) *Brief Observations on a Late Letter Addressed to the Right Hon. W. Pitt, by W. Boyd, Esq. & c. on the Stoppage of Issues in Specie by the Bank of England*. London: J. Debrett.
- Baring, Sir F. (1797a) *Observations on the Establishment of the Bank of England, and on the Paper Circulation of the Country*. London: Printed for Sewell, Cornhill, and Debrett. イギリス金融史論研究会訳『イングランド銀行論 イングランド銀行と紙券通貨流通に関する考察』日本経済評論社, 1988, 所収.
- (1797b) *Further Observations on the Establishment of the Bank of England, and on the Paper Circulation of the Country*. London: Privately Distributed. イギリス金融史論研究会訳『イングランド銀行論 イングランド銀行と紙券通貨流通に関する考察』日本経済評論社, 1988, 所収.
- (1801) *Observations on the Publication of Walter Boyd, Esq. M.P.* London: Printed by W. Lane for J. Sewell and J. Debrett.
- ([1810]1951) 'Evidence' before the Bullion Committee. As reprinted in the *Report on the High Price of Bullion with Minutes of Evidence*. Sydney: The University of Sydney.
- Blake, W. ([1810]1969) *Observations on the Principles which regulate the Course of Exchanges; and on the Present Depreciated State of the Currency*. New York: Burt Franklin.
- 酒井一夫監訳『外国為替相場変動論』駿河台出版社, 1992.
- Boyd, W. (1801a) *A Letter to the Right Honourable William Pitt, on the Influence of the Stoppage of Issues in Specie at the Bank of England, on the Prices of Provisions, and Other Commodities*. 1st edn. London: Printed by T. Gillet for J. Wright.
- (1801b) *A Letter to the Right Honourable William Pitt, on the Influence of the Stoppage of Issues in Specie at the Bank of England, on the Prices of Provisions, and Other Commodities. The Second Edition, With additional Notes; and a Preface, Containing Remarks on the Publication of Sir Francis Baring, Bart.* London: Printed by T. Gellat for J. Wright and J. Mawman.
- (1811) *A Letter to the Right Honourable William Pitt, on the Influence of the Stoppage of Issues in Specie at the Bank of England, on the Prices of Provisions, and Other Commodities*. 2nd [but really 1st] edn. London: Printed for James Ridgeway.
- Capie, F. (1993) *History of Banking 1650-1850*. 10 vols. London: Pickering & Chatto.

湘南工科大学紀要 第41巻 第1号

- Chalmers, G. ([1811] 1969) *Considerations on Commerce, Bullion & Coin, Circulation and Exchanges & c.* New York: Augustus M. Kelley.
- Clapham, Sir J. (1944) *The Bank of England: A History*. 2 vols. Cambridge: Cambridge University Press. 英国金融史研究会訳『イングランド銀行』(全2巻)ダイヤモンド社, 1970.
- Cope, S. R. (1983) *Walter Boyd: A Merchant Banker in the Age of Napoleon*. Gloucester: Alan Sutton.
- Fetter, F. W. (ed.) (1957) *Economic Writings of Francis Horner in the Edinburgh Review 1802–6*. New York: Kelley & Millman.
- (1965) *Development of British Monetary Orthodoxy 1797–1875*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Fortescue, Earl (1844) *A Selection from the Speech and Writings of the late Lord King*. London: Longman, Brown, Green, and Longmans.
- Great Britain, Parliament. (1819) *Reports from the Secret Committee on the Expediency of the Bank resuming Cash Payments. (British Parliamentary Papers, Monetary Policy, General 2)*. [BPP 1819]
- Hawtrey, R. G. (1928) *Currency and Credit*. 3rd edn. London: Longmans, Green and Co.
- Hayek, F. A. v. (1939) 'Introduction' in Thornton ([1802] 1939).
- Helleiner, K. F. (1965) *The Imperial Loans: A Study in Financial and Diplomatic History*. Oxford: Clarendon Press.
- Hollander, J. H. (1911) 'The Development of the Theory of Money from Adam Smith to David Ricardo.' *Quarterly Journal of Economics* 25(3): 429–70.
- Honer, F. ([1802] 1957) 'Thornton on the Paper Credit of Great Britain.' As reprinted in Fetter (1957). 渡辺佐平・杉本俊朗訳『紙券信用論』実業之日本社, 1948, 所収.
- ([1803] 1957) 'Lord King's Thoughts on the Restriction of Payments in Specie at the Banks of England and Ireland.' As reprinted Fetter (1957).
- Horsefield, J.K. ([1944] 1953) 'Duties of a Banker. II.' As reprinted in *Papers in English Monetary History*, ed. T. S. Ashton and R. S. Sayers. Oxford: Clarendon Press.
- Joplin, T. (1832) *An Analysis and History of the Currency Question*. London: James Ridgway.
- King, Lord P. (1804) *Thoughts on the Effects of the Bank Restrictions*. 2nd edn. London: Printed for Cadell and Davies, and J. Debrett.
- McCulloch, J. R. ([1845] 1964) *The Literature of Political Economy*. New York: Augustus M. Kelley.
- (ed.) ([1857] 1995) *A Select Collection of Scarce and Valuable Tracts and Other Publications on Paper Currency and Banking*. London: William Pickering.
- Macleod, H. D. (1855–56) *Theory and Practice of Banking*. 2 vols. 1st edn. London: Longman, Brown, Green, and Longmans.
- (1876) *Theory and Practice of Banking*. 2 vols. 3rd edn. London: Longman, Green, Reader, and Dyer.
- (1902–6) *Theory and Practice of Banking*. 2 vols. 6th edn. London: Longmans, Green, and Co.
- Malthus, T. R. ([1800] 1986) *An Investigation of the Cause of the Present High Price of Provisions*. In vol. 7 of *The Works of Thomas Robert Malthus*, ed. E. A. Wrigley and D. Souden, 8 vols. London: William Pickering.
- O'Brien, D.P. (ed.) (1994) *Foundations of Monetary Economics*. 6 vols. London: William Pickering.
- (2004) *The Classical Economists Revisited*. Oxford: Oxford University Press.
- Pressnell, L. S. (1956) *Country Banking in the Industrial Revolution*. Oxford: Clarendon Press.
- Ricardo, D. (1951–73) *The Works and Correspondence of David Ricardo*. 11 vols. Ed. P. Sraffa with the collaboration of M.H. Dobb. Cambridge: Cambridge University Press. 日本語版「リカード全集」刊行委員会訳『リカード全集』(全11巻)雄松堂, 1969–99.
- Senior, N. W. (1846) 'Speeches and Writings of the Late Lord King.' *Edinburgh Review* 84: 315–43.
- Sherwig, J. M. (1969) *Guineas and Gunpowder: British Foreign Aid in the Wars with France, 1793–1815*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Silberling, N. J. (1924) 'Financial and Monetary Policy of Great Britain during the Napoleonic Wars II.' *Quarterly Journal of Economics*, 38(3): 397–439.
- Smith, A. ([1776] 1976) *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, edited by R. H. Campbell, A. S. Skinner and W. B. Todd. Oxford: Clarendon Press. 2 vols. 水田洋監訳・杉山忠平訳『国富論』(全4巻)岩波文庫, 2000–2001.
- Stephens, T. A. (1897) *A Contribution to the Bibliography of the Bank of England*. London: Effingham Wilson & Co.
- Thornton, H. ([1797] 1939) 'Evidence' before the Committees of Secrecy of the Two Houses of Parliament on the Bank of England. As reprinted in Thornton ([1802] 1939), pp. 277–310.
- ([1802] 1939) *An Enquiry into the Nature and Effects of the Paper Credit of Great Britain*. Edited with an intro. by F. A. v. Hayek. London: Allen & Unwin. 渡辺佐平・杉本俊朗訳『紙券信用論』実業之日本社, 1948.
- ([1804] 1939) 'Notes on Lord King's Thoughts on the Effects of the Bank Restriction.' As reprinted in Thornton ([1802] 1939), pp. 311–322.
- Tooke, T., and Newmarch, W. ([1838–57] 1928). *A History of Prices*. Reprinted with an intro. by T. E. Gregory. 6 vols. London: P.S. King & Son. 藤塚知義訳『物価史』(全6巻)東洋経済新報社, 1978–92.
- Viner, J. (1937) *Studies in the Theory of International Trade*. New York: Harper & Brothers.
- Walker, F. C. (1878) *Money*. New York: Henry Hold & Co.
- Wheatley, (1807) *An Essay on the Theory of Money and Principles of Commerce*. vol. 1. London: Printed for T. Cadell

ポイド = ベアリング論争 (1797–1801) 地金論争の源流とその余波 (佐藤有史)

and W. Davies.

Wood, J. H. (2005) *A History of Central Banking in Great Britain and the United States*. Cambridge: Cambridge University Press.

Wu, C. Y. (1939) *An Outline of International Price Theories*.

London: George Routledge & Sons.

Ziegler, P. (1988) *The Sixth Great Power: A history of one of the greatest of all banking families, the House of Barings, 1762–1929*. New York: Alfred A. Knopf.